

Title	マジャール人と中世前期のバイエルン：歴史的地域研究史論
Sub Title	Magyaren und Bayern in der ersten Hälfte des Mittelalters : ein geschichtlich-landeskundlicher Versuch
Author	森田, 茂(Morita, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.31 (2000. 9) ,p.1- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20000930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マジャール人と 中世前期のバイエルン —— 歴史的地域研究試論 ——

森 田 茂

はじめに

788年、フランク王国のカール大帝によりアギロルフィング家のバイエルン公タシロ3世は、本紀要第28号に述べられているように、家族共々、バイエルンの地から追放される。1180年、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ1世バルバロッサにより、ヴィテルスバハ家の宮廷伯オットー2世がバイエルン公に取り立てられる。この400年間に様々な出来事が起こる。まず10世紀にはマジャール人が大挙して東フランク王国を始め西方世界に侵入し、劫掠の限りを尽す。その惨禍から立ち直るのに地域によっては半世紀以上を要した、と言われる。11世紀にはグレゴリウス改革（教会改革・叙任権闘争）が本格的に始まる。12世紀には皇帝選挙に端を発するシュタウフェン家とヴェルフェン家の熾烈な争いがドイツ及びバイエルン地域の歴史を彩る。本稿では、これら諸事件のうち、マジャール人の西方侵寇を視野に収めつつ、タシロ3世以後のバイエルン及びフランク王国の変遷を、955年の「レヒフェルトの戦い」に至るまでに限定して、見て行く。

1. タシロ3世追放後

788年、バイエルン公タシロ3世がフランク王国国王カール大帝により

バイエルン公の地位を追われる¹⁾。これによりバイエルンはその自立性を失い、カール大帝治下のフランク王国の一属州に転化する。このタシロ3世追放事件は、カール大帝に言わせれば「オーディオとタシロという二人の悪人が乱していた秩序を回復しただけ」²⁾に過ぎない。以後カール大帝はバイエルンを公 dux にではなく、伯 comes 或いは代官 praefectus 或いは王使 missus に統治させる（ゲーロルト Gerold 及びアウドゥルフ Audulf³⁾）。バイエルンの統治者が「バイエルン部族法典 Lex Baiuvariorum」に明記されている「公 Herzog」から「伯」に変わった点を除けば——これは大問題ではあるものの——バイエルンに関してはこの政変は大きな変動を来さなかった。一つの行政単位としてバイエルンは、その名を含めて残され、支配領域にも

1) 「タシロ3世の公位追放に関する通説は殆ど虚構に近い」とする研究が公刊されている。この研究は „Annales regni Francorum et Annales qui dicuntur Einhardi“ (所謂 „Die Reichsannalen“) を根拠に成り立っていた従来の「通説」への強烈な反論。説得力豊かなこの論考については、次ぎの機会にその詳細を紹介したい。

2) Handbuch der Bayerischen Geschichte. Hrsg. von Max Spindler. 2., überarbeitete Aufl. München. Beck. 1981. (以後 HBG) Bd.1. S.250.

3) Gerold はアギロルフィング家とも姻戚関係を持つ中部ライン地方の名門貴族の出、カール大帝の3番目の妻ヒルデガルト Hildegard の兄弟、つまりカール大帝の義兄弟である。Gerold (=Garibald) はゲーロルディング家 (Geroldinger) で受け継がれてきた名前だが、Garibald はアギロルフィング家の中心的名前。彼は、799年9月1日アヴァール人との戦いで決戦の前に戦死する (Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. Stuttgart-Weimar. Metzler. 1999. [以後 LMa] Bd.4. Sp.1350)。

Karl Brunner, Oppositionelle Gruppen im Karolingerreich, in: Veröffentlichungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung Bd. 25 S. 66 及び LMa Bd. 8 Sp. 1261 によれば、Audulf はウンルオヒング家 Unruochinger との関連が考えられる貴族で、同家はカーロリング家と縁戚関係があるとされる。ウンルオヒング家の祖とされるウンルオホ Unruoch 及び上述のゲーロルト同様、Audulf もカール大帝の遺言の実施に責任を持つ30名の遺言書署名人の一人。彼は、組織化の才能で頭角を顕わし、785/86年のカール大帝のブルターニュ征討で武勲を立て、カール大帝の内膳正^{ナイゼンシレウ}をも務めた。

変化はなく、アギロルフィン家家の支配態様も引き継がれ、「バイエルン部族法典」も健在だったからである。バイエルンという国としてのまとまりも、ザルツブルク司教区が大司教区に格上げされたことにより、従来よりも強められた。

一方、ドイツ東南部に位置し、東方の辺境域と接していたバイエルンのフランク王国における最大の任務は、スラヴ人居住域への政治的・宗教的影響力を拡大することであった。タシロ3世は既にその治世においてカラントニア Karantanien を征服していた。従って、カール大帝にとってはアヴァール人攻略が主要目標となる。バイエルンとアヴァール人の関係は、タシロ3世追放の一因となるほどに良好であった。将にそれ故にであろうか、カール大帝はアヴァール人に攻撃を掛け、ラープ河 Raab まで彼らを押し返し、その間の地域を自領に組み入れる。その後もカール大帝は間断無くアヴァール人を攻め、802年の戦いではバイエルンの初代代官ゲーロルト及びオストマルク Ostmark 或いは Ostland⁴⁾の初代代官ゴトラム Gotram を死に至らしめる。アヴァール人居住区は特定し難い。と言うのも、それが、或る時は Avaria, 或る時は Hunnia, 或る時は Pannonia, とされ、夢幻自在だからである。兎も角、アヴァール人が排除された後は、オストマルクは安定し、バイエルン支配下に落ち着く。カール大帝はボヘミア地域にも触手を伸ばし、オストマルク同様、ボヘミアをもバイエルンに組み入れる。バイエルンの支配域は、これにより徐々に拡大して行く。

806年、カール大帝の元でフランク王国分割が予定され、バイエルンは、タシロ3世時代の領域のままに、大帝の長男ピピン Pippin der Bucklige の統治に委ねられることになるが、王宮所在地インゴルシュタット Ingolstadt とラウタホーフェン Lauterhofen は除かれる。しかし、この分割計画はピピンの夭折により実現されなかった。

4) 9世紀末段階での狭義のオストマルクはトラウンガウ Traungau からウィーン山地 Wiener Wald 辺りまでを言う。

時代は移って、ルートヴィヒ1世敬虔帝 Ludwig I. der Fromme 治世下の814年、敬虔帝は、長男ロータル1世 Lothar I. にバイエルンを与え、バイエルンの自立的支配を認める。つまり、この段階でバイエルンは部分王国（或いは分割王国）Teilregnum 或いは Unterkönigtum に変身する。この措置のバイエルンに与えた影響は甚大である。バイエルンの統治者が、「伯」から「王」に変わったのである。これはバイエルンの広範な層に自らの居住域を自立的「国家」として意識するきっかけを与える。しかしロータル1世のバイエルン統治については見るべきものはない。と言うのも、817年には、その後のバイエルンの進む道を大きく規定する結果を導く弟のルートヴィヒ（後のルートヴィヒ2世ドイツ人王 Ludwig II. der Deutsche）の手にバイエルン統治が委ねられるからである。ルートヴィヒには前述のピピンの場合には除外されていた二つの王宮所在地も与えられ、更にカラントニア人、ボヘミア人、アヴァール人、スラヴ人の居住域も統治対象とされる。この取り決めがされた817年、当のルートヴィヒは12歳に過ぎなかった。819年、二代目代官アウドゥルフが死ぬ。しかしその後継者は任命されなかった。ルートヴィヒが将来、相続地を自由に統治できるように、という配慮に基づいて、らしい⁵⁾。

2. ルートヴィヒ2世ドイツ人王

825年、ルートヴィヒが統治を開始する。「神の恩寵によるバイエルン人の王ルートヴィヒ」という署名入り国王詔書が発せられるのは830年以後であるが、この署名からルートヴィヒがバイエルンに対して抱く将来像が見て取れよう。ルートヴィヒの統治目標は、東方政策、と、カーロリング朝フランク王国内でのバイエルンの地位向上、の二点にある。

先ずルートヴィヒは、フリアウル辺境区を四辺境区（Friaul, Istrien, Krain, Unterpannonien-Slowenien）に編成替えし、各辺境区に伯を置く。またカラ

5) HBG Bd.1. S.259.

ンタニアの代官をスラヴ人からバイエルン人に入れ替え、権力の分散を図ると同時に、中央への権力集中を容易にする。これらの措置は西方への勢力伸長を図るブルガリア対策⁶⁾とされるが、当時のバイエルンにとっての主要な敵手はモラヴィア大王国 das Großmährische Reich であった。

一方、ルートヴィヒはフランク王国内でのバイエルンの地位向上のため、ルートヴィヒ1世敬虔帝の様々なフランク王国分割案に抵抗する。彼は、自らの意図する分割内容を容認させるためには、父王敬虔帝に対する武力行使すら厭わない。ルートヴィヒ敬虔帝がルートヴィヒ・ドイツ人王の異母弟シャルル2世禿頭王 Karl II. der Kahle にアレマニア Alemannien を含む地域を与えようとした時、つまり832年の反乱がその例である。この反乱は功を奏し、ルートヴィヒ・ドイツ人王はアレマニアを獲得する。彼は今や益々自立志向を強め、833年以降は自らを「バイエルン人の王」ではなく、単に「国王」、つまり、東フランク王国国王、と称するに至る。

840年、ルートヴィヒ敬虔帝が逝去すると、皇帝の長男ロータル1世は、アキタニア Aquitanien を統治する弟ピピン Pippin を味方に引き入れ、自己の帝権下に二人の弟、ルートヴィヒ・ドイツ人王とシャルル禿頭王、を屈服させんと画策する。ルートヴィヒはシャルルと組み、841年6月には、皇帝軍を下す。842年、ルートヴィヒとシャルルは、ロータルと個別取引はしない誓約を交わす。これがドイツ語史及びフランス語史に名高い「ストラスブールの誓約 Straßburger Eide」⁷⁾ である。翌843年、ヴェルダン条約 Vertrag von Verdun が三兄弟間で締結され、ルートヴィヒ・ドイツ人王の東フランク王国 Ostfränkisches Reich 支配が最終的に協定される。

アウドゥルフの死(818年)以後、代官は暫く置かれぬままだったが、

6) HBG Bd.1. S.261.

7) 同一の誓約内容を、ルートヴィヒ・ドイツ人王は当時の古代高地ドイツ語で、異母弟のシャルル禿頭王は古期ロマンス語で、記したもの。この文書は両国が既に言語の上でも別個に発展していることを明示する。Vgl. W. Braune-K. Helm: Althochdeutsches Lesebuch. Max Niemeyer Verlag. Tübingen. 1952. S.45f.

ルートヴィヒ・ドイツ人王の支配が東フランク全体に広がったため、代官設置の必要が出て、エルンスト Ernst 伯⁸⁾がバイエルの三代目代官に、ラートボト Ratbod 伯がオストマルクの代官に任命される⁹⁾。

ヴェルダン条約以後、ルートヴィヒ・ドイツ人王は東方政策に積極的に取り組む。ボヘミア Böhmen ではプシェミスル家が台頭して来る。845年に14名のボヘミアの諸侯が洗礼を受けたことは、宣教上の成果であると同時に政治上の成果でもあった。一方、翌846年、ルートヴィヒ・ドイツ人王は軍勢を引き連れモラヴィア Mähren に行き、「秩序造成と関係改善のため」と称してモイミール1世 Moimir I. を王位から追放、その甥ラスティスラフ Rastislav 或いは Rostislav を王位に即ける。しかしラスティスラフも東フランク王国の支配からの脱出を図り、853年バイエルンを攻撃する。ラスティスラフと繋がりを持つオストマルク代官ラートボトも叛旗を翻す。これをきっかけにモラヴィア情勢は一気に流動化する。しかし軍事力に優るルートヴィヒ・ドイツ人王は856年ラスティスラフの叛乱を鎮め、代官ラートボトを解職、後任に長男カールマン Karlmann を充てる。しかし長男カールマンも、861年、ラスティスラフと結託して父王に反逆、イン河 Inn までのバイエルン領土を手に入れる。ルートヴィヒ・ドイツ人王は、これと関連してであろう、カールマンの義父のバイエルン代官エルンスト伯の職を解く。ルートヴィヒは863年に初めてカールマンを捕えることができた。しかし、カールマンは翌年にはもう東方に逃亡する。865年、ルートヴィヒは王国の分割相続を決定する。その際、彼はカールマンを赦し、長男の彼には、バイエルの他、東方の辺境域共々、スラヴ人、ボヘミア人、モラヴィア人の統治を、次男ルートヴィヒ3世ジュニア Ludwig III. der Jüngere には、東部フランケ

8) エルンスト伯には「公にして王の友の第一人者」「貴族のうちの貴族」「バイエルン軍の統帥」等の肩書きが付く。ルートヴィヒ・ドイツ人王の長男カールマンの義父。

9) ラートボト伯は、20年以上在職、オストマルクで絶大な権力を握り、他地域の伯同様、繰り返し国王に対して叛乱を惹き起こす。

ン Ostfranken, ティーリングゲン Thüringen, ザクセン Sachsen を, 三男カール 3 世肥満王 Karl III. der Dicke には, アレマニアとクール・ラエティア Chur-Raetien 地域を相続させ, 三人を副王とし, 各領国を支配させる。

ラスティスラフは相も変わらず策謀を続ける。869 年, 彼はビザンツ帝国と同盟, バイエルンを脅かす。ルートヴィヒ・ドイツ人王がラスティスラフを排除できたのは 870 年にラスティスラフの甥スヴァトブルク 1 世 Swatopluk I. がラスティスラフを捕えてルートヴィヒに差し出した時である。ルートヴィヒはラスティスラフの眼を潰す。スヴァトブルク 1 世も一時ルートヴィヒ・ドイツ人王に反抗をするが, 874 年ルートヴィヒはスヴァトブルク 1 世と和平を結ぶ。この和平にボヘミアも加わり, この時点で, バイエルンはボヘミア山塊 Böhmerwald からドナウ河までの地域をその支配下に収める。876 年 8 月 28 日, 半世紀に亘ってバイエルンを支配し, その独自性を強化したルートヴィヒ 2 世ドイツ人王は死去する。彼は, ドイツの諸地域を支配しその統治者として行動した最初の王であり, ドイツ人王, という添え名は将に彼に相応しい。

ルートヴィヒ・ドイツ人王が東フランク王国の王位に即いて (843 年) 以来, バイエルンは彼の支配の根拠地に, レーゲンスブルク Regensburg はその首都になる。ローマが 179 年にカストラ・レギーナ Castra Regina という名で設置したこの軍団根拠地は, アギロルフィング家, カーロリング家が現在の「旧穀物市場 Alter Kornmarkt」の辺りに王宮を置き, カール大帝も滞在したことのある由緒ある都市である。この町は, ルートヴィヒ・ドイツ人王時代に, その繁栄の基礎を更に磐石にした, と言えよう。

父ルートヴィヒ・ドイツ人王の後を継いだカールマンは, 「バイエルン王 rex Bawariorum」と称し, 877 年イタリアをもその支配下に収め, バイエルンとイタリアの結合を更に強める。東方に関しては, 彼は, その辺境域に代官を置く従来路線を踏襲, オストマルクの統治を庶子アルヌルフに委ねる。このアルヌルフが, 所謂アルヌルフ・フォン・ケルンテン Arnulf von Kärnten である。この名からして, アルヌルフには当初カラントニア Karanta-

nien = Kärnten の統治のみが委ねられたのであろう。878年、父王カールマンが卒中で倒れる。880年に彼が死ぬと、バイエルンは、次弟ルートヴィヒ3世ジュニアの統治下に入るが、このルートヴィヒも882年死去、バイエルンはルートヴィヒの弟、カール3世肥満王の手に渡る。かつての王子、発展への大きな可能性を秘めたバイエルン王国王子アルヌルフには、今や、カール3世の臣下に成り下がる以外、手の打ちようが無くなってしまう。

この経過を当時の東フランク王国及び更に西方地域にまで視点を広げて見ると——カールマンの次弟ルートヴィヒ3世ジュニアは、幸運に恵まれると同時にその政治的・軍事的手腕も手伝って、ロートリンゲン Lothringen を得る。彼の国はフランケン Franken, ザクセン, ティーリングエンを含む強大な王国となる。しかし彼も882年に世を去る。かくして、三人兄弟の中で最小の領地を貰った末弟カール3世肥満王が、今や、長兄カールマンが入手していたイタリア王国をも獲得して皇帝の称号を獲得（881年）、二人の兄の支配地を含めた東フランク王国全域の支配権を掌握したのみならず、更に西フランク王国のルイ3世とその次弟カールマンの相次ぐ急死（882年と884年）とその後の西フランク王国内の混乱もあって、885年、東西両フランク王国を統治する皇帝になる。

3. 皇帝アルヌルフ

カール大帝当時の所領を一手に収めたカール3世肥満王にしてみれば、バイエルン地域などほんの付け足しでしかない。彼には、バイエルンを、その未来像を描きつつ、統合・統治する意志は無い。彼のバイエルン人事がそれを明示する。彼は、バイエルンを代官エンギルデォ Engildeo 伯に、ドナウ地域を代官アリボ Aribio 辺境伯に、カラントニアをアルヌルフに委ねその統治域を広げようとしめない。

カール肥満王の甥アルヌルフ・フォン・ケルンテンは、モラヴィア王国国王スヴァトブルク1世と平和条約を締結することによって東方情勢を安定させつつ（885年）、カラントニアに権力基盤を固める。遂に彼は887年、バイ

エルン人とスラヴ人から成る強力な兵を率いクーデタを起こし、叔父カール肥満王を退位に追い込み、自ら広大な東西両フランク王国の支配者になる。大王国の国王に即位したものの、彼は分裂状態にある旧西フランク王国には関心を示さない。888年、西フランクの有力者たちからの西フランク王国国王への即位要請を彼は拒否する。西フランク王国ではパリからノルマン人を駆逐したロベール家 Robertiner のパリ伯ウード Udo がコンピエーニュ Compiègne で国王に推挙される。ロベール家は、ライン河中流域の豪族で、後にカペー家 Kapetinger の祖となった家門、しかしカーロリング家との血縁関係は持たなかったため、自らの支配を固めるためには、強大な東フランク王国国王アルヌルフの承認が欲しかった。アルヌルフは何と言ってもカーロリング家の末裔。そこでウードは888年8月ヴォルムス Worms に赴き、アルヌルフに托身を行ない、アルヌルフの宗主的支配権を承認する。上ブルグンド Oberburgund 国王ルードルフ Rudolf もアルヌルフの宗主的支配権を同様に認める。アルヌルフがこのように西フランク王国に関心を示さず、フランク王国再建の意図をも持たなかった理由については様々に憶測されている。その理由として挙げられるのは、まず東フランク王国の安定化を優先させカール肥満王の轍は踏まぬ、という賢明な配慮があったから、という見解¹⁰⁾もあれば、西方の分立諸小国 *reguli* の再建に彼の貴重なエネルギーは向けられないから、という趣旨の見解¹¹⁾もある。アルヌルフには、東方に不安定要因を抱えつつ、言語的にも文化的にも夫々独自の発展を遂げた両国の基盤を一つに統合することは不可能、という認識があったに違いない。

国王アルヌルフは、バイエルンを最大の権力基盤とし、レーゲンスブルクに宮廷を置きここから兵を各所に派遣する——さながら、ルートヴィヒ2世ドイツ人王の再来、である。既にモラヴィア王国と平和条約を締結していた

10) Deutsche Geschichte im Überblick. Hrsg. von Peter Rassow. 3., überarbeitete und ergänzte Aufl., hrsg. von Theodor Schieffer. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung. Stuttgart. 1973. (以後 DGÜ) S.99.

11) HBG Bd.1. S.278.

彼は、890年にはスヴァトブルク1世にボヘミアを割譲し、モラヴィアとの友好関係を強める。こうして東方外交を精力的にこなすと同時に、彼は891年11月1日、ディレ Dyle 河畔のレーヴェン Löwen¹²⁾でヨーロッパ西北部を悩ませていたノルマン人＝ヴァイキングーに勝利を収め、これによりロートリンゲンと東フランケンに決定的にノルマン人から解放される。彼の名声は一挙に上がる。一方、アルヌルフからボヘミア地域を割譲されたモラヴィア王国は、その後益々力をつけ、ボヘミア、シュレジア Schlesien、ドナウ盆地の一部をも併合、更にパンノニア辺境域にまで迫って来た。そこでモラヴィアのこれ以上の強大化を怖れたアルヌルフは、892年、スヴァトブルク1世に戦いを仕掛ける。この戦いでアルヌルフに味方をしたのが、スラヴ人ブラズラヴォ Brazlawo¹³⁾ 或いは Breslaw 公と、マジャール人だった。この闘いでスヴァトブルク側は決戦を避け籠城戦術を採ったため、アルヌルフは4週間に亙る攻囲の後、引き上げる。しかし、マジャール人を味方に付けたことに関して直ぐ、ヨーロッパにマジャール人を呼び込むとは何たること！との批判の声があがる——862年にルートヴィヒ2世ドイツ人王の長男カールマンが既にモラヴィア対策でマジャール人と共同作戦を行なってはいたのであるが——。国王アルヌルフにしてみれば、当時益々勢力を増大していたモラヴィアこそ彼の王国にとっての最大危険要因だったのであり、それに、マジャール人については当時はまだ十分に情報が揃っていなかった、という事情もあったのであろう。

このモラヴィア侵攻の際にアルヌルフから援軍を依頼されたマジャール人

12) 現在のベルギー地域。

13) Ferenc Majoros und Rill Bernd: Bayern und die Magyaren. Die Geschichte einer elfjahrhundertjährigen Beziehung. Regensburg. Pustet. 1991. S.12によれば、アルヌルフ・フォン・ケルンテンは、この戦役の際にドナウ北岸に建設された橋頭堡に、この作戦に協力したブラズラヴォ Brazlawo 或いは Breslaw 公の名に因んで、Brezauluspurc という名を与えた。これが Brezesburg を経てプレズブルク Preßburg になった。因みに現地名は Bratislava。

は894年アルヌルフを訪れ、再度援軍として自分たちを使ってくれるよう、頼んだらしい。アルヌルフがそれを聞き入れぬと分ると、彼らは、その帰途、パンノニアで掠奪行為を働く。これを知ったアルヌルフは、マジャール人対策として要塞や避難場所を建設すると同時に、サバ Save 河畔の伯領（後にクリンと呼ばれる地域）にはラートルト伯 Ratold von Ebersberg を、カランタニアと上パンノニア Oberpannonien¹⁴⁾にはルーイトポルト Luitpold 伯を、スラヴォニアと下パンノニア¹⁵⁾にはスラヴ人のブラズラヴォ公を投入する。

894年、スヴァトプルク1世は死ぬ。王国を継いだ二人の息子モイミールとスヴァトプルク2世は、895年、アルヌルフに和を求め、和平協定締結に導く。この機会を捉えてボヘミアは独立し、ボヘミアの二人の侯が新たにアルヌルフに托身を行なう。

896年、国王アルヌルフは皇帝になる。897年モラヴィアに攻撃されたボヘミアはアルヌルフに助けを求める。しかしこの年モラヴィアで両兄弟間の争いが起こる。これを利用してアルヌルフはモラヴィアを攻略する。899年12月8日、皇帝アルヌルフは死去、彼の息子ルートヴィヒ4世幼童王 Ludwig IV. das Kind が7歳で国王に即位する。しかし王室の弱体化を、バイエルン、ザクセン、ティーリングン、シュヴァーベン、ロートリングン、フランケン等の諸侯は見逃さない。また、世人の眼は東方のマジャール人に向けられている。レーゲンスブルクでは既に894年にマジャール人がパンノニアで行なった残虐行為が知られていたからである¹⁶⁾。

14) ドナウ盆地のフィシャ河 Fische (ウィーン東方20km 辺でドナウ右岸に流れ込む) とラープ河の間の地域。

15) ドナウ盆地のラープ河とドラバ河 Drau の間の地域。

16) DGÜ S.99.

4. マジャール人

マジャール人¹⁷⁾の西方への最初の進出は、上述のように、862年とされるが¹⁸⁾、その後凡そ20年間マジャール人についての情報は絶える。862年頃の彼らの居住域は、アーテルクズ Etekköz と呼ばれ、ドナウ河口を含む黒海北部に広がる黒海低地辺りだったようである。マジャール人の祖先 Majghari¹⁹⁾は、もともとはヴォルガ河 Wolga 及びオカ河 Oka 流域に居たが、そこからこの肥沃な黒海低地に移動したのは 822-26年の頃、テュルク系の強大なハザール帝国（或いは汗国）Chazarenreich が内戦により荒廃した頃、とされ、移動の理由は、河川による輸送を行っていたノルマン系ヴァイキング（ヴァレーガー Waräger とルーシとも呼ばれる）と関連あり、とされる。つまり、河川輸送を通じてアラビア人と直接交易を行っていたノルマン人にとって南ロシアで掠奪行為を働くマジャール人が邪魔になったのである。そこでマジャール人は、ルーシに追い出される形でその地を離れ南方に向かい、822年頃、ハザール汗国西方に姿を現した訳である。マジャール人はハザール帝国にとっても脅威となる厄介な存在で、マジャール人がこの地に移動して来たため、ハザール人は彼らとの間に防御施設を建設したほどであった。新天地アーテルクズへの移動過程でフィン＝ウゴル系 finnisch-ugrisch のマジャール人がアルタイ＝テュルク系 altaisch-türkisch²⁰⁾ のオノグル人と合体、

17) Brockhaus-Enzyklopädie. 19., völlig neu bearbeitete Aufl. Mannheim. 1990. Bd.14. S.41 によれば、ハンガリー人の96.6%がマジャール人を自認する。

ハンガリー人とマジャール人の関係は「日本人」と「大和民族」の関係のようなもの。

18) Szabolcs de Vajay: Der Eintritt des ungarischen Stammesbundes in die europäische Geschichte. von Hase & Koehler Verlag. Mainz. 1968. (以後 Vajay) S.11.

19) Majghari 人は、古くからヴォルガ河－オカ河地域に居住した Meschchera 人と同一、とされている。

20) どちらも非印欧語系の言語、ウラル＝アルタイ語族に属する。これらの言語は紀元前4000年頃のウラル地方及びカマ河・オビ河流域にその起源を持つ、とされる。

両種族は「血の契り Blutskontrakt」²¹⁾ を交わして新国家を建設する（ドイツ語の Ungarn, Magyaren の語源は Onogur, Majghari)²²⁾。この頃既に彼らの新国家北辺にはノルマン系ヴァイキングーの主導でキーエフ王国²³⁾が建国されていた。一方、マジャール人とオノグル人から成る新国家の軍勢力は当時周辺に脅威を与えていたので、ハザール帝国は、新国家とは、時に争うことはあっても、9世紀半ばから平穏な同盟関係にあった。しかしこの新国家は、東をハザール帝国に塞がれ、北をキーエフ王国に塞がれたため、西に活路を見出さざるを得なかった。

862年、初めて西欧に、恐らく東フランク王国の東部に、マジャール人が出現したのには以上のような背景があったが、それだけでなく、東フランク王国絡みの事情もあった。既述のように、東フランク王国国王ルートヴィヒ2世ドイツ人王は、モラヴィア大王国の急成長に神経を尖らせ、王国東部の境界域を再編し防備を固めていた。しかし、ルートヴィヒ・ドイツ人王の長男カールマンが、861年、父王に反逆する。そのとき彼はモラヴィア公ラティスラフと手を結ぶ。するとラティスラフはカールマンにマジャール人を仲介する。従って862年ドナウ周辺に姿を現したマジャール人はカールマンの援軍だったのである²⁴⁾。西方進出を狙っていたマジャール人にとって、こ

21) Georg Spitzlberger: Die Ungarnstürme des zehnten Jahrhunderts. In: Beiträge zur Heimatkunde von Niederbayern. Bd.1. 1967. (以後 Spitzlberger) S.137 によれば、契約締結に関わる出席者全員が腕の血管から血を採って混ぜ合わせそれを全員で飲み永遠の誓いとする儀式。これはハザール人から受け継いだもの。現代の予防医学・公衆衛生学の観点からは考えられない彼らの仕来たり。

22) Vajay S.12.

23) 13世紀前半にモンゴル人の支配下に入り、以後遊牧騎馬民族に蹂躪されるが、後にロシア帝国に発展する。新版世界各国史 20：ポーランド・ウクライナ・バルト史。伊東孝之・他編。山川出版社。1998年。96頁以下によれば、この建国にはノルマン系商人団とトルコ系ハザール汗国が関わり、商人団長の娘と汗国の王子との婚姻で王朝が成立する。この商人団の扱う主要商品は奴隷で、買い手はアラブ人とユダヤ人。

24) Vajay S.14.

れは渡りに船，であり，彼らは，偵察を兼ねて，ドナウ河に出現した訳である。この時既にレーゲンスブルクはマジャール人に対する恐怖の念に襲われた，と言われる²⁵⁾。

881年，マジャール軍が，前衛と後衛を従え，堂々たる編成で，ウィーン山地に姿を現す。この時もモラヴィア公スヴァトブルクと同盟してのことで，東フランク王国軍と二度戦闘を交えただけでマジャール人は帰路につく。このマジャール軍との顔合わせは，カールマンの庶子アルヌルフ（フォン・ケルンテン）にとっても，マジャール人にとっても，有意義であった。後に国王となるアルヌルフはマジャール軍騎兵隊の優れた戦力を知る機会を得た。当時の東フランク王国軍は，重い鎧を身に着けて地上を這いずり回っていた。騎馬での戦いにはまったく不慣れ。弓矢を駆使するマジャール軍騎兵隊の機動力を眼前にしてアルヌルフは舌を巻いたことであろう。一方，マジャール人にとっては，ドナウ盆地を通して東フランク王国国境域に通じる道，言わば，黄金の西方への門，を発見したことが収穫であった。

ところで，9世紀後半，ペチェネグ人 Petschenegen にたびたび劫掠されたハザール人は彼らを追い払う。追われて西に向かったペチェネグ人はマジャール人居住域に侵入し掠奪を繰り返す。そのためマジャール人は西方のドナウ盆地への移住を決意する。しかし同盟関係にあるモラヴィアのスヴァトブルク公がそれに抵抗する。マジャール人の欠落によってモラヴィア大王国構想の一端が崩れるからである。そこでマジャール人は彼に，これまでの軍事協力の見返りにモラヴィア領の一部を自分達に提供するよう，要求するが，拒否される。この情勢は，モラヴィアの脅威を取り除こうとしていた東フランク王国国王アルヌルフにとって，モラヴィア攻撃の願ってもない好機。アルヌルフはマジャール人と和解の上，彼らと反モラヴィア同盟を結成し，892年モラヴィアに出陣，マジャール人はモラヴィアを叩き，ドナウ盆地へ

25) Rudolf Lüttich: Ungarnzüge in Europa im 10. Jahrhundert. Verlag von Emil Ebering. Berlin. 1910. (以後 Lüttich) S.20.

去る。894年、アルヌルフは更にボヘミアを服従させる。東方の外患を断ち背後を固めたアルヌルフは、896年2月22日、ローマで帝冠を戴く。

5. 西方世界の論理

東フランク王国国王アルヌルフが戴冠した頃、フランク王国は東部も西部も解体の危機に瀕していた。かてて加えて、地中海域ではアラブ人がスペインやシシリア、プロヴァンスやイタリアの海岸を荒らし、大陸北部ではヴァイキングーがイギリスやフランス、フリースランドやザクセンを蹂躪、東欧ではモラヴィア人に続いてマジャール人が跋扈していた。だが、後に見るように、西方諸国は、これら野蛮な移動民族をどんなに軽蔑するにせよ、自らの利益を追求する段になると、彼らとの同盟すら厭わない。

895-96年にドナウ盆地、凡そドナウ河とタイス河 Theiß の間の地域、に入ったマジャール人は、この地にウゴルスカ Ugorska (>Ungarn) と言う名を与える²⁶⁾。以後、本稿でも彼らを「ハンガリー人」と呼ぶ。ハンガリー人は当初7部族からなっていたが、この頃には3部族、東部のジュラ族 Gyula、西部のホルカ族 Horka、ホルカ族近辺のアールパード族 Árpáden、に収斂していた。二人国王制の元、アールパード Árpád とクルサーン Kurszán が国王を務め、西方侵寇の主導権を取ったのはホルカ族の名将ブルチュ Bulscu であった。ブルチュは、ハンガリー人の西方への窓口役、西方の人間は諸種の問題を彼に持ちかけた²⁷⁾。

彼らハンガリー人は、この新天地でブルガリアのシメオン Simeon に脅かされる。そんな時、ハンガリー人はビザンツ帝国皇帝レオン6世 Leon VI から同盟を求められる。理由は、当時、ビザンツ帝国の南方はアラブ人に荒らされ、北方はブルガリアのシメオンに脅かされていたからである。ハンガリー人はビザンツ帝国の軍船に乗ってドナウ河を遡りブルガリアに侵入、ブ

26) Spitzlberger S.139.

27) Spitzlberger S.141.

ルガリア軍に打撃を与える。更にアラブ人に海戦を挑みこれを打破する。しかし、アラブ人の脅威から解放されたビザンツ皇帝レオンは、895年、ブルガリアと和睦してブルガリアにハンガリー人を攻撃させる。シメオンはペチェネグ人やモラヴィア人とも連合し、ハンガリー軍の根絶を図る。ハンガリー人は大敗北を喫する。しかし、更に追い討ちを掛けてきたブルガリア軍を、ハンガリー王の一人アールパード Árpád が撃滅する。これによりブルガリアのドナウ盆地支配は終りを告げる。

この一部始終を注視していた皇帝アルヌルフはハンガリー人と同盟を結ぶ。ハンガリー人は、この同盟を尊重、皇帝アルヌルフ存命中はフランク王国領も下パンノニアも荒らさない。というのも西南方には繁栄を謳歌する豊かな北イタリアが広がっていたからである。898年、彼らはイタリアを初侵寇する。899年のハンガリー人によるロンバルディア Lombardei 侵寇は大規模で、アキレリア Aquileja、トレヴィソ Treviso、ヴェローナ Verona を掠奪、イタリア国王ベレンガル Berengar²⁸⁾ の首都パヴィア Pavia にまで肉薄した。ハンガリー人の力を過小評価していたベレンガルはブレンタ Brenta²⁹⁾ 河畔の戦いで大敗北を喫する。この敗北からベレンガルは大きな戦略的教訓を引き出す。即ち、従来の戦術では到底屈服させられないこの相手と同盟すれば、彼らが今後は自分にとって強力な武器になろう³⁰⁾、と結論した訳である。翌900年、ハンガリー人は、ヴェネツィア Venedig を攻撃するが、近郊の町に火をかける程度で終る。905年までにはベレンガルはハンガリー人と何らかの協定に達していたようである。

28) 当時、皇帝アルヌルフはベレンガルと対立していた事情もこの侵寇に囁んでいるようである。Vajay S.14 参照。

29) 北イタリアのヴェネツィア近辺を流れ、アドリア海に注ぐ。

30) Heinrich Büttner: Die Ungarn, das Reich und Europa bis zur Lechfeldschlacht des Jahres 955. In: Zeitschrift für bayerische Landesgeschichte Bd. 19. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung München. 1956. (以後 Büttner) S. 439.

899年12月8日、ハンガリーの同盟者皇帝アルヌルフが死去する。

6. プレスブルクの戦い

マジャール人がバイエルンにとって真の危険要因になるのは、彼らがペチェネグ人によって黒海沿岸の居住地を追われ、西方に新天地を求め出してからで、その後凡そ半世紀間、西方世界はハンガリー人の侵寇に苦しむ。

皇帝アルヌルフが死去すると状況は一変する。聖界の影響を強く受けた新王ルートヴィヒ4世幼童王は、アルヌルフがハンガリーと結んだ同盟を、異教徒との同盟、と非難し承認しない。更に、スラヴォニア Slawonien 公で下パンノニア代官ブラズラヴォも、ハンガリー人こそ今後のパンノニアにとって危険要素、と考え、この同盟に反対する。そこでハンガリー人は使節をレーゲンスブルクに派遣——偵察も兼ねてであろう——、同盟の更新を要請するが、使節は追い帰される。直ちにハンガリー人はパンノニアに侵攻、下パンノニア代官ブラズラヴォを死に至らしめ、パンノニアはハンガリー人の占拠するところとなる。今やハンガリー人がバイエルン人の直接の隣人になる。彼らの行動は、皇帝アルヌルフ没後の国情を計算に入れてのこと、だった。

900年11月20日、ハンガリー人が大挙してバイエルンに侵入する。辺境伯ルーイトポルトは、パッサウ司教リーヒアル Richar と共にリンツ Linz 近傍のドナウ河畔で初めてハンガリー人と戦い、ハンガリー人騎兵凡そ1200名の命を奪う。しかし主力部隊は大きな荷物を背負いつつも既に戦場を去っていた。彼は、急遽、ドナウ左岸に要塞エンスブルク Ennsburg を新設、ハンガリー人の襲撃に備える。

901年4月18日、カラントニアにハンガリー人が侵入し掠奪をする。しかし、多くの掠奪品を背負った彼らは、帰路、バイエルン軍に撃破される。

ハンガリー人の「掠奪品」は物品に限らない。彼らは人間をも捕まえ、身代金を要求したり売買したりする。奴隷売買は高収益をもたらした。従って、彼らが帰国する際には必ず捕まえた人間を引き連れている。彼らはアーテル

クズに居住していた当時から捕虜売買に関わっていた。当時の捕虜は主としてスラヴ人であったが、今や西方の人間が捕虜・奴隷になる。彼らは西方でも奴隷を売る。売買の恐怖に慄いた領民は、すべての拘束をかなぐり捨てて、逃亡する。領主制度の崩壊に通じる現象である。ハンガリー人は帰国後は自分たちの不得意な耕作を奴隷にやらせる。売ると決められた奴隷はアラブ人やユダヤ商人に引き取られたり、或いはドナウ河を舟で黒海沿岸の奴隷市に運ばれる。奴隷売買が当時如何に一般的現象であったかは、904年頃、ルートヴィヒ幼童王の下命でルーイトポルトがまとめた「ラフェルシュタト関税規定 Raffelstätter Zollordnung」に余すところなく示されている。この規定の中には、若い女及び雄馬は3分の1金シリング、若い男及び雌馬は2分の1金シリングを関税として徴収する、との文言があるのである³¹⁾。人身売買への批判は皆無である。

ハンガリー人の掠奪対象になった若い女や中年女性は彼らの性欲充足のために彼らの手元に置かれる。この彼らの行為は民族の深層にまでその影響を及ぼす。人種混淆が起きたのである。モンゴル・コーカサス系の彼ら民族の血にスラヴ及びゲルマン及びラテンの血が混じり、それは、骨格を変えたのみならず、その心情にまで変化を惹き起こす。ハンガリー人は身近な性欲対象からキリスト教を知りその文化を受容するに至った³²⁾、と言えよう。イシュトヴァーン1世(後の聖シュテファン1世:在位997-1038)のキリスト教受容の背景として、このことの持つ意義は大きいと言えよう。

902年³³⁾、ハンガリー人の侵寇を軍事的に解決できない東フランク王国上層部は、ハンガリー人と和平を結ぶ手筈を整え、フィッシャ河畔で交渉を持つ。

31) Die Chronik Bayerns: Hrsg. von Hans F. Nöhbauer. 3., überarbeitete u. aktualisierte Aufl. Chronik Verlag. München. 1994. S.61

32) Spitzlberger S.161.

33) 904年説もある。Vajay S.38 及び Wilhelm Störmer: Ostfränkische Herrschaftskrise und Herausforderung durch die Ungarn. In: Forschungen zur Geschichte der Städte und Märkte Österreichs. Bd.4. (以後 Störmer) S.59 参照。

そして宴会を開きハンガリー国王の一人クルサーン公以下従者を招く。が、バイエルン人はクルサーン公以下全員を殺害する——「ニーベルンゲンの歌 Nibelungenlied」後段を想わせる事件である。この謀殺への復讐は直ちには行なわれなかった。と言うのも、クルサーン公が殺害されたため、ハンガリー人は、二人の公による伝統的支配 Doppelfürstentum³⁴⁾を捨て一人の公による支配へ変更した結果、国内に騒擾が生まれたらしいのである。これ以後アールバード公が支配者になる。

ハンガリー人は国制変更と同時に戦術転換をも行なう。即ち、従来、イタリアをも掠奪対象にしていたが、それを止め、彼らの影響力、換言すれば攻撃目標、を主として、バイエルンやザクセンに隣接するモラヴィアやボヘミアに絞ることにする。906年、モラヴィアはハンガリー人の襲撃により解体し、スヴァトプルクの二人の息子が早速犠牲になる。

906年6月25日、ハンガリー人は初めてザクセンに侵寇する。エールツ山脈 Erzgebirge の北に居住するスラヴ系のダレミンツ人 Daleminzen³⁵⁾が、ザクセン公オットー2世 Otto II. に圧迫され、ハンガリー人に救援要請したからである。彼らはザクセン軍を打ち砕く。女たちは、半裸にされ、互いの毛髪で結び付けられ、家畜のように引き摺られて行った、とのこと。これをきっかけに、ハンガリー人の掠奪行はドイツの中部・北部に拡大する。

この間、バイエルンはハンガリー人の襲撃からほぼ免れたため、辺境伯ルーイトポルトは、902年に始まったフランケン³⁶⁾の覇権を巡るバーベンベルク家 Babenberger とコンラート家 Konradiner の争い、世に言う「バーベンベルク家の私闘 Babenberger Fehde」に関わる——このことからルーイトポルト自身ハンガリー問題を未だそれほど重視していなかったことが知れよう。この私闘は906年、バーベンベルク家のアードルベルト Adalbert の斬

34) Vajay S.37.

35) LMa Bd.3. Sp.439によれば、彼らは805年の資料に初めて登場し独立を享受していた。929年ハインリヒ1世に征服さる。ソルビア人 Sorben との関係は不明。

首を以って終り、以後コンラート家がフランケン公位に就く。このコンラート家から出た最初の東フランク王国国王が、コンラート1世である。

ハンガリー人の戦術転換は、経済活動面でも、ヨーロッパに大きな変化をもたらす。オストマルクとエルベ河との連絡、ロシアやバルト海との連絡がぶつ切り切れてしまったのである。ルーイトポルトは、そのため、ハンガリー軍圧服のための防衛戦争を計画、ルートヴィヒ幼童王の許可を得て、軍を集める。これが成功すれば今後ハンガリー人の掠奪から免れ、ボヘミア、モラヴィア、パンノニアがバイエルンの影響下に戻ってくる可能性があった。

907年6月17日、ハンガリー攻撃に向かう東フランク王国軍の出陣式が新設の要塞エンスブルクから程遠からぬザンクト・フローリアン St. Florian で行なわれる。これにはルートヴィヒ幼童王も列席し、総司令官ルーイトポルトは「公」に昇格する³⁶⁾。ルーイトポルトは、この年のアールパード国王の死から生まれたハンガリーの不安定な国情をも計算に入れて、ハンガリー軍の徹底壊滅を狙っていた。この戦いは敵地に侵入しての作戦である。バイエルン軍は、勢力を、左岸軍・右岸軍・水軍、に三分し、ドナウ河沿いにプレスブルクに向かう。しかし7月4日の緒戦でハンガリー人は、東フランク王国軍を包囲戦に誘い込み、矢の雨を浴びせ、壊滅させてしまう。辺境伯ルーイトポルト公、ザルツブルク大司教ティートマル Thietmar, フライジング Freising 司教ウード Udo, ゼーベン Säben 司教ツァハリアス Zacharias の他、伯19名、僧院長3名等、多くの伯が命を失う。敗走するバイエルン兵を追ってハンガリー人はバイエルン支配地域の奥深くエンス河 Enns にまで達する。彼らは掠奪もした。僧院から奪うのは、聖盃、モンストラーツ、ミサ服、金・銀・真珠・宝石の織り込みや嵌め込み細工がされた高価な物品である。この時の劫掠でパンノニアからは教会が全て消え去った、と言われる³⁷⁾。902年のクルサーン公謀殺事件の落し前を彼らはきっちりつけたので

36) Vajay S.42.

37) Spitzlberger S.148.

ある。

プレスブルクの戦いでバイエルンはエンス河東方の全辺境を失い、結果的にこの戦いはハンガリー軍の戦略構想の大部分を実現させてしまう。バイエルンとの国境をエンス河まで押し広げた彼らは、イタリア王ベレンガルと和平を締結、ドナウ周辺のスラヴ人を征圧、彼らの行く手を遮るものは今や無く、新たに獲得したエンス河東域は彼らの西方への出撃根拠地になる。

7. アルヌルフ悪玉公

プレスブルクの合戦で落命したルーイトポルトは、アルヌルフ国王に仕えた王国第一の実力者。ルートヴィヒ4世幼童王治下の王国においては宮中顧問官を務め、王国の中心的人物と言っていい存在。彼が、国王アルヌルフの母リッツヴィント Liutswind を通して³⁸⁾、カーロリング家とも姻戚関係にあったことは、彼の実子にアルヌルフ（後のアルヌルフ悪玉公 Arnulf der Böse）という名を与えていることから知れよう。このルーイトポルトがルーイトポルト家の始祖であり、同家は、シュヴァーベン公家とも縁続きのため、この後、バイエルン及びシュヴァーベンと大きく関わることとなる。

ルーイトポルト落命後、その実子アルヌルフが後を継ぐ。父ルーイトポルトが国王から諸種の任務を拝命したのに対して、実子アルヌルフは、実力で、つまり王命を経ずして、父の管轄下の領土を引き継いだらしい。アルヌルフにしてみれば、カーロリング家との姻戚関係を持つ以上、自分がバイエルン支配を引き継ぐのは当然、と判断していたようで、斜陽のカーロリング家に見切りをつけつつあったバイエルン諸侯の支持も得ていたらしい。アルヌルフは、しかし、父と異なり、宮廷には一切出仕しなかった。そして王勅を見習って発せられたと思われる彼の文書には「神の恩寵によりバイエルン及び近隣を支配する公 Herzog アルヌルフ」という肩書きを用いた。この時、オ

38) Störmer S.56 参照。尚 DGÜ S.99 によれば、ルーイトポルトは皇帝アルヌルフの甥。

ストマルクは既に失われている。アルヌルフのバイエルン復興の並々ならぬ意欲がここに示される。このアルヌルフが、主体的に、つまり王命によってではなく独自に、バイエルン救済のため、ハンガリー問題と関わる。元々、ルーイトポルト家はルートヴィヒ幼童王等に仕えた役人の家柄、他の諸侯と違って所領には恵まれていなかった。家臣への増封など自力ではできない。そこでアルヌルフは新たな軍隊を創設する原資の獲得のため、ハンガリー人の襲撃により荒廃し聖職者も居なくなってしまった教会領を積極的に世俗化する *säkularisieren*³⁹⁾、つまり、一般の世俗領、この場合はルーイトポルト家の所領、に転化し、戦士に与える封の原資とし、バイエルンに忠実な家臣の増幅を図る。このために彼は教会関係の年代記者から「悪玉公 *der Böse*」と言う綽名を頂戴してしまったのである。世俗化が実施されたのは 907-914 年とされている⁴⁰⁾。この間、アルヌルフと国王との関係は良く、民衆に密着した教会とアルヌルフとの関係も一般に想定されるよりは良かったらしい。何しろアルヌルフは一心にハンガリー人対策に取り組んでいたし、ハンガリー人の最大の襲撃目標は金銀財宝の溜まり場である諸侯の屋敷、そして教会並びに僧院だったからである。しかし、世俗化に対する教会の上層勢力、特に各司教座の反感は大きかった。これに対抗するには彼一人では力不足、そこで彼は、母クニグンデ *Kunigunde* の兄弟であるシュヴァーベン公エルヒャンガー *Erchanger* とベルトルト *Berthold* を味方につける。従って、シュヴァーベンの親族と彼との同盟は、単に各部族の自主性擁護という地域エゴイズムに発しただけでなく、国内の強力な権力機関への対抗策でもあった。しかし、バイエルンとシュヴァーベンという強力な両部族の結合は自ら

39) カーロリング家宮宰 *Karl Martell* (†741) もカーロリング家の発展基盤形成のため「世俗化」を行なった。余りに広大な所領を所有していた *Eucherius von Orléans* (†738) の所領没収がその例。Vgl. *Rudolf Schieffer: Die Karolinger. Stuttgart, Berlin-Köln-Kohlhammer. 1992. S.47.* 及び *Pierre Riché: Die Karolinger. 3. Aufl. DTV. München. 1995. S.56-59.*

40) *HBG Bd.1 S.282.*

の影響力を強めようとしていた後のコンラート1世の不興を買う結果を生む。

東部領土の大半を失ったバイエルン人、かつてない大勝利を収めたハンガリー人、双方とも、争うことなく、暫くは平和に暮らしたようである。これは、ルーイトポルトの後を継いだアルヌルフとハンガリー人の間に何らかの平和協定が結ばれていたため、と Vajay は推測する⁴¹⁾。そして Vajay は、アルヌルフが宮廷に皆無とっていいほど出仕しなかったこと、及び、ルートヴィヒ幼童王死後の国王選挙に立候補しなかったのは、この平和協定と関連があるからではないか、とする。何らかの協定が存在したことを証する文献は無い。だが、遊牧騎馬民族の常として、彼らとの協定は彼らにすれば口頭だけで充分なのである。

ところで、ハンガリー人は防御を施された地域を劫掠しないことから、907年のプレスブルクの戦い以後、被害が予想される施設・地域は周囲に防御壁を巡らせたり、岩山の突端に築城することが多くなる。一般人のための避難施設 Fliehburg も建設される。このような作業は、特に927年から933年までの「平和の訪れ」の間に進捗する（例：ドーナウシュタッフ城 Donau-stauf）。中世後期以後、即ち11世紀前後以降の西欧の築城術は、ヴァイキングーからと同時に、ハンガリー人対策から多くを学んでいるのである。

909年、ハンガリー人は初めてシュヴァーベンを劫掠、帰路フライジングを通り、シュテファン教会 Stephanskirche に火を放つ。アルヌルフ公配下の兵が彼らの若干の部隊をロット河畔 Rott ポッキング Pocking で打破する。これは大きな成果ではなかったが、東方の危険から住民を護ろうとするアルヌルフの姿勢が十分に表わされているものと言えよう。

910年6月22日、シュヴァーベンでハンガリー人は王国軍を制圧する。この時ハンガリー軍は得意の陽動作戦を採る。相手に敗走と見せかけ、茂みに隠れ、敵軍を包囲網の中に呼び込み、それから殲滅する作戦である。幼童王の軍隊はこの戦術に引掛かった。意気揚々帰途に就く彼らをアルヌルフ

41) Vajay S.45.

悪玉公の軍勢が攻撃する。が、攻撃されたのはハンガリー軍の一部にしか過ぎず、主力は大量の捕獲物と共に既にエンス河の彼方に去っていた。

911年、ハンガリー人は、バイエルン、フランケン、シュヴァーベン、アレマニアを劫掠、更に初めてライン河に出現、西フランク王国をも侵す。西王国はこの戦いでコンラート家のラインガウ伯ゲープハルト Gebhard (後の東フランク王国国王コンラート1世の伯父)を失う。今やハンガリー人は東フランク王国の殆どを征圧したのみならず西フランク王国にも手を付ける。つまり、東西フランク王国は騎馬民族ハンガリー人の捲き起こす嵐の真っ只中であつた。これがルートヴィヒ4世幼童王が死去した911年当時の状況である。

911年9月24日、ルートヴィヒ幼童王が死亡し、11月には東フランク王国国王選挙集会がフォルヒハイム Forchheim で開催される。その集会にバイエルンとシュヴァーベンは代表を送らない。選挙はフランケン人とザクセン人が主導し、東フランク王国国王候補者もこの両集団の指導者コンラートとハインリヒの兩人だけ。恐らくアルヌルフ悪玉公も、家柄・権勢・軍事力からして、問題無く国王候補になっていたであろうが、アルヌルフ悪玉公自身が、国王同然に振舞えるバイエルン王国から不安定な東フランク王国に乗換える意志を持たなかつたのではあるまいか、という推測もある⁴²⁾。結局、フランケン公コンラートが東フランク王国国王に選出され(コンラート1世 Konrad I.)、カーロリング家の血をひく国王の伝統に終止符が打たれる。アルヌルフ悪玉公は即位式に欠席する。この彼の欠席をハンガリー人は、アルヌルフが王国の政策に追随するものではない、と受け取る。

912年、ハンガリー人はフランケンとティーリングゲンを襲う。新国王の反応を見るためのようであるが、その帰路、バイエルンを通つたらしいが、バイエルン劫掠の記録は存在しない。

912年にはアルヌルフ悪玉公はウルム Ulm のコンラート1世の宮廷に出仕し国王との関係も円満であつた。コンラート1世は913年バイエルンへの

42) HBG Bd.1 S.283.

勢力の浸透を図るため、アルヌルフ悪玉公の母、つまりルーイトポルトの未亡人クニグンデと結婚したりするが、コンラート1世はこの間にフランケン領となっていたロートリンゲンを失ってしまう上に、910年以後厳しさを加えてきたハンガリー人問題にも何ら対処できなかった。彼にはもはや、軍隊を召集する力が無かった、諸侯を束ねる権威が無かった、のである。

913年、コンラート1世の所領の劫掠を意図してハンガリー人が侵寇してくる。コンラート1世はロートリンゲン防衛に必死だったので、ハンガリー人はやすやすとライン河を渡り、ブルグンドにまで至る。だが彼らは、帰路、イン河のアシュバハ Aschbach 辺で攻撃され、捕獲物と大量の兵を失う大敗北を喫する。東フランク王国側の軍隊を指揮したのは、シュヴァーベン公エルヒャンガーとベルトルト、それにアルヌルフ悪玉公だった。アルヌルフにしてみれば、バイエルン公としての立場があったであろう。兎も角この勝利により、アルヌルフ悪玉公の令名は東フランク王国に轟く。

アルヌルフ悪玉公は従来の戦術では打ち破れないハンガリー軍について勉強もしていた。即ち、892年にハンガリー人がモラヴィアのズヴァトブルク1世攻撃の援軍としてやってきた際、当時のバイエルン人や東フランク王国人は、従来と全く異なるハンガリー軍の戦術を眼前にしていた。ハンガリー軍は、一騎討ちのような近接戦は採らず、遠巻きにして攻撃を仕掛ける包囲戦術を採用し、包囲せよ、殲滅せよ、を戦術の最終目標としていた。バイエルンの軍指揮官たちは、ハンガリー軍の戦術を最初に知ると同時に、その後の対ハンガリー軍との辛い経験から、攻撃のタイミングとしては「掠奪物を背負ったり車に乗せたりして疲れて彼らが家路に就くとき」⁴³⁾、特に彼らの渡河の際が最も適切、と知ったのである。

ハンガリー軍は、909年のロット河でも、また913年のイン河でも、アルヌルフ悪玉公相手に戦って敗北を重ねた。そこでハンガリー人は、バイエルン軍との消耗戦を避けるため、アルヌルフ悪玉公に友好的平和協定締結を申

43) Störmer S.58.

し入れる。つまり、バイエルンはハンガリー人に対してバイエルンの自由通行を認めるが、ハンガリー人はバイエルンを劫掠しない、との7年間協定⁴⁴⁾である。これはアルヌルフ悪玉公にとっては、貢納金支払いが含まれていなかったため、有利な協定で、締結に達したらしい。これ以後ほぼ20年間、バイエルンはハンガリー人の劫掠活動から免れ、両者の軍事衝突の情報も、小規模なものを除けば、ほぼ無くなる。

914年コンラート1世は、アルヌルフ悪玉公がコンラートの政敵エルヒェンガーと組んだことを理由に、アルヌルフに戦いを仕掛ける。アルヌルフは皇帝軍には敵わない。そこで彼は、妻子共々、叔父エルヒェンガーとベルトルトの他、主だった家臣を引き連れハンガリー人の元に逃げ込む。これに関連して興味ある推論がある⁴⁵⁾。即ち、907年のプレスブルクでの大敗の後バイエルンは、907年か908年に、ハンガリー人との間に貢納金支払いを含む協定を結ぶが、その協定の実効性を双方が保証するために、アルヌルフ悪玉公は、既に正妻ユーディットJudithを亡くしていたこともあって、ハンガリーの公女と結婚、この「異教徒との結婚」のためにアルヌルフ悪玉公の後妻については何の記録も残らず、ルートヴィヒ幼童王死後の国王選挙でもアルヌルフ悪玉公が無視されたのではあるまいか、というものである。

915年、ハンガリー人は攻撃対象をティーリングエンとザクセンに絞る。当時ザクセンを支配していたハインリヒ公（後の国王ハインリヒ1世）は順調にその勢力を拡大していた。その結果、彼は国王コンラート1世と対立する。またザクセンの南東部ではボヘミア人とダレミンツ人が蜂起している。この情勢を見てのティーリングエン侵寇であった。ハンガリー人の他の一隊は、バイエルンからの独立に際してハンガリー人の協力を得たボヘミア人と合体、ザクセンを襲撃、北海Nordseeにまで至り、ブレーメンBremenに火をつける。また他の一隊は、デンマークにまで進撃する。この頃には彼らは、襲撃

44) Vajay S.52によれば、マジャーール人の協定有効期間は通常7年間。

45) Vajay S.54.及びBenno Hubensteiner: Bayerische Geschichte. 10. Aufl. München. 1997. (以後Hubensteiner) S.72.

目標決定の際、行き当たりばったりにではなく、十分な偵察により様々な地域・国家の全般的状態、特に政治状況の完全な把握の後に、目標を決定するようになっていた⁴⁶⁾。

916年、アルヌルフは、ザルツブルク経由で、ハンガリーからレーゲンスブルクに帰国する。ザルツブルクで恐らく大司教を味方に引き入れようとしたのであろうが、レーゲンスブルクでアルヌルフは攻囲され、打ち負かされ、再度ハンガリーへの逃亡を余儀なくされる。教会側は、この事件に関しては、一貫して国王側に立つ。その理由は、王国教会の地位から領国教会の地位に引き下ろされるのを嫌ったから、と言われる。アルヌルフ悪玉公は以後、教会勢力を頼らずに、攻撃に出る。

917年、西フランク王国の王権を巡るフランスでのロベール家とカーロリング家の争いに乗じて⁴⁷⁾、ハンガリー人は、小勢ではあったが、初めてフランスに、偵察かたがた侵入する。彼らはブルグンド、エルザス、ロートリンゲンをも涉猟したらしい。因みに、これらの地域はいずれもロベール家及びその一統の領地であった。即ち、ハンガリー人はカーロリング家一統支援のためフランスに出現したのである。ハンガリー人は西フランク王国の政治情勢をも的確に把握していた、と言える。

同じ917年1月、ハンガリー軍は、バイエルンを通過、アルヌルフ悪玉公を裏切ったシュヴァーベン人を襲う。恐らくアルヌルフ悪玉公と協議の上であらう。するとこれに怒ったコンラート1世はアルヌルフ悪玉公の同盟者エルヒャンガーとベルトルトを処刑する。この間にアルヌルフ悪玉公はレーゲンスブルクを取り戻し、バイエルンを支配していたコンラート1世の弟、エーバハルト Eberhard を追い出してしまう。

翌918年、アルヌルフは国王コンラート1世軍を打ち負かす。コンラート1世は、その戦闘での受傷がもとで、918年12月23日に死ぬ。

46) Büttner S.444.

47) 911年、ヴァィキングーは今日の Normandie に所領（公国）を得ている。

8. ハインリヒ 1 世とリァデの戦い

919年5月、ザクセンの名門リッドルフィンゲン家 Liudolfinger のハインリヒが東フランク王国王位に即く（ハインリヒ 1 世 Heinrich I.）。この国王推挙の場合もアルヌルフ悪玉公は候補者に選出されていたようである。それは兎も角、フリツラー Fritzlär でハインリヒ 1 世が国王に選出されたのと同じ頃、バイエルンではアルヌルフ悪玉公が国王に選出された。この事態について、通説は、アルヌルフをドイツ史上最初の対立国王と捉え、ハインリヒ 1 世を正当な国王とする。これとは多少異なった考えもある。即ち、アルヌルフがバイエルン王位に即いたのは、ルートヴィヒ 2 世ドイツ人王やその長子カールマンがバイエルン王位に即いたのと同じ意味で王位に即いたのであって、919年の事態は、単一国家内での二重選挙ではなく、東フランク王国からバイエルンを中心とした地域がアルヌルフを擁して分離独立しようとしたことから生じた事態である、という考え方である⁴⁸⁾。この考え方は、アルヌルフを単に対立国王と捉えるだけでは不十分、との態度を表明している点で意義を持つ。これを「独立説」として置こう。ところが、この件に関して更に次ぎのような興味深い考察もある。即ち、コンラート 1 世死去とハインリヒ 1 世即位の間の時間差が大きいのは、アルヌルフ悪玉公の国王推挙が決まっていたところにハインリヒ 1 世が国王候補として割り込んで来たからである、との考察である⁴⁹⁾。「通説」の逆を行く説である。「独立説」には、所謂東フランク王国からの分離志向が強かったルートヴィヒ・ドイツ人王、アルヌルフ・フォン・ケルンテン等バイエルン人の姿勢が鮮明にされる。だが「バイエルン人の分離・独立志向」については「通説」「逆説」共にその存在を否定しない。とすると「独立説」の内容は幾分希薄にならざるを得ない。神聖ローマ帝国解体時に「バイエルン王国」が成立した史実を持ち出すまでもな

48) 世界歴史大系・ドイツ史 1, 山田欣吾・他編, 山川出版社, 1997年, 113頁.

49) HBG Bd.1. S.285.

く、この独立志向は近代に至るまでのバイエルン人の強固な属性と言えよう。ところで、英明でエネルギー豊富な俊才ハインリヒ1世の即位後の行動を追うと、彼の諸侯に対する対応は不自然なくらい低姿勢である。「逆説」に基づくと、この彼の余りの不自然さの由来が理解されるのではあるまいか。「逆説」を採ることが当時の東フランク王国やバイエルンの置かれた諸状況を把握する最良の道であるように思えるが、如何であろう。

919年、ハインリヒ1世が即位すると、ハンガリー人はザクセンに攻撃を掛け、王国軍はピーヒェン Püchen 近郊で敗戦の憂き目をみる。それ以後924年前半までは、ハンガリー人は、イタリア・フランスで、同盟者、例えばベレンガル、にはその戦闘力を提供しつつ、敵対者、例えばロベール家、にはその劫掠の威力を見せつける。

アルヌルフ悪玉公は、921年、ハインリヒ1世が執着した東フランク王国王位の放棄及びハインリヒ1世の国王高権の承認と引き換えに、内政・外政について広範な自由裁量執行権及び教会高権（具体的には司教任命権）をハインリヒから入手する。このような王にしか許されない特権をアルヌルフ悪玉公がハインリヒから得たことについては、アルヌルフがハンガリー人と同盟していたから、とする見解もある⁵⁰⁾。この特権授与は同年の「レーゲンスブルク協定 Regensburger Abkommen」で確認される。この協定締結交渉は外国との外交交渉と軌を一にしていた、と言われるほどに対等の立場で締結されたらしい。つまり、ハインリヒはアルヌルフにバイエルンの王国としての独立を承認したも同然だったのである。従って、アルヌルフにすれば、ボヘミアは東フランク王国にではなくバイエルンに従属するものであるから、アルヌルフは誰憚ることなくボヘミアに対して平然と武力干渉をした。ハインリヒ1世はそれを黙認する他なかった。

924年、ハンガリー人はハインリヒ1世の家領のあるザクセンを劫掠する。しかし、王国最大の敵、ハンガリー人への対抗策を見出せないハインリヒは、

50) Vajay S.64. Anm.240.

戦いを構えもせず、オーカ Oker 河畔ヴェァラ Werla にある防備を固めた王宮に引き籠もり拱手傍観せざるを得なかった。そんな時、幸運に恵まれてか、一人のハンガリーの有力者——アールパード家の一員であろう⁵¹⁾——が捕虜になる。この機会を捉えてハインリヒはハンガリー人との交渉を開始する。当時、ハンガリー側にも悩みはあった。それというのも、今後もイタリア・フランス・ドイツを相手に戦うことには耐えられないのではないか、ドイツよりもイタリア・フランスの方が遙かに豊かで防備も疎か、従ってドイツへの攻撃を縮小しイタリア・フランスへの攻撃を拡大すべきではないか。そんなところへのハインリヒ 1 世の交渉申し入れであった。両者の利害は一致した。ザクセン・フランケン・ティーリングンを対象とする平和が取り決められ、ドイツ側には貢納金支払いが義務付けられるものの、926年、これと引き換えに捕虜が釈放され、有効期間 9 年の平和協定が締結される。

東フランク王国にとって 926 年以後の年月は実に貴重であった。この間にハインリヒ 1 世は、国王として初めて、ロートリンゲンやライン河におけるヴァイキング対策の経験からも学びつつ、今後のハンガリー人侵攻に対する防備態勢を固める。926 年 11 月、ヴォルムスの王国会議で諸侯の参加を得て、ハインリヒは全国的規模の一連の重要な決定を行なう。対ハンガリー軍攻撃部隊の編成、彼らの侵寇対策として城郭建設規則 *Burgenbauordnung* の制定⁵²⁾、司教座・教会・僧院の防備充実等を決定し、結果的に彼は王国の中央集権体制をも固める。対外的にも彼は大きな成果を収める。国内騒乱の続くフランスからはロートリンゲンを取り戻し、北部では、スラヴ人の首都ブレンナボル *Brennabor* 後の *Brandenburg* を制し、929 年、マイセン *Meißen* にダレミンツ人の監督を委ねることができ、バイエルン公アルヌルフ悪玉公

51) Hans K. Schulze: *Hegemoniales Kaisertum*. In: *Siedler Deutsche Geschichte*. Berlin. Siedler. 1991. (以後 Schulze) S.156. Werla は Wolfenbüttel 南方 10km 辺にある町。

52) 本来築城高権は国王に属するが、以後この高権分与規則は諸侯の築城ブームを結果する。

の協力を得てボヘミアに出兵、ボレスラフ Boleslaw と戦いプラハ Prag を押さえ、ヴェンツェル Wenzel 公を王国の封臣にする。

ハンガリー人は、協定締結後、イタリア・フランスへと出撃する。イタリアの政争に巻き込まれたシュヴァーベン⁵³は荒廃するが、926年5月1日、シュヴァーベンのザンクト・ガレン St. Gallen 僧院にハンガリー人が姿を現す。彼らは、頭のおかしい修道士ヘリバルド Heribald に呆気に取られ、何もせず引き上げる。同年11月初旬、ハインリヒ1世はコンラート家のヘルマン Hermann⁵³をシュヴァーベン公に任命してシュヴァーベンの安定化を図る。この時点でハンガリー人との協定の対象がシュヴァーベンにも広げられたようである。対象から外れているのはバイエルンだけとなる。926年、ハンガリー軍はアックスブルク Augsburg に現れるが、貢納金を獲得して去る。バイエルン地域は荒されたようで、バイエルンは急速にハンガリー人と協定を更新する。これにより東フランク王国全域が協定対象地域となった訳である。

9年間の有効期間を設定してハンガリーと東フランク王国の間に締結された926年の平和協定に基づき、933年、ハンガリーの使者が貢納金の受け取りに現れる。しかし素っ気無く断られ素手で帰国する。ハンガリー人は直ちに報復軍を組織する。カルパティア山脈を横断して同盟国ダレミンツ人の元に寄り、同盟を更新しようとするが、ダレミンツ人は、ハインリヒ1世及びザクセン側の戦争準備を知っていたため、欲得づくめのハンガリー人め！と非難しつつ同盟更新を断る。ハンガリー軍はザーレ河 Saale を渡りティーリングゲンに入り、劫掠の限りを尽す。ここで彼らは、西と南からザクセンを攻略するために、軍を二分する。しかし南方軍は、3月初旬頃、住民の決起に遭って全滅する。西方軍は、南方軍が全滅したこと、ハインリヒ1世が報

53) DGÜ S.106及び Handbuch der deutschen Geschichte/Gebhardt. Hrsg. von Herbert Grundmann. 9., neu bearbeitete Aufl. Stuttgart. Klett-Cotta. 1981. Bd.1. S.227.

復戦に備えてリアデ Riade⁵⁴⁾ に陣を張ったことを知り、急遽隊列を整える。3月15日、ハインリヒ1世は軍を進め開戦する。ハンガリー軍が大軍を避ける習性を持っていることを知っていたハインリヒは、先ず小編成の軍をおとりに使って、彼らに攻撃させる。的小编成軍は敗走と見せかけて、ハンガリー軍を味方の大軍の前に誘き寄せる。ハインリヒは逃げ足の速いハンガリー軍に梃子摺りはしたものの、勝利を収める。これが「リアデの戦い Schlacht bei Riade」である。十分な準備を重ねたハインリヒの軍にハンガリー人は到底対抗できず、この戦いはハンガリー軍の一方的敗北で結末に至る。ハインリヒの名とその勇猛果断さは広く西方にまで轟く。ハンガリー人は、以後5年間、東フランク王国を襲撃しない。

この戦い以後、ハンガリー人は活躍の場をイタリア、西フランク王国方面に見出す。934年、ハンガリー人は、教皇庁の官僚機構と闘うローマ教皇を窮地から救い出すため、イタリア半島で再び活躍する。936年、西フランク王国国王にルイ4世が即位すると、諸侯は、カーロリング家の血を継ぐこの国王に背を向け、自立性を強める。937年、事情通のハンガリー人は先ずイタリア南部のカプアにまで達し、その後ロートリンゲンを侵寇し、続いてフランス領に入り、反ルイ4世派の諸侯領を荒らす。序でに彼らはブルグントを通過してイタリア南端まで劫掠した、とのこと、等々……⁵⁵⁾。

9. オットー1世とバイエルン公ハインリヒ1世

936年7月2日、ハインリヒ1世は死去する。アルヌルフ悪玉公は後継国王選挙に出席する。8月にはオットー1世 Otto I. の戴冠式が举行され、それ

54) Lüttich S.82ff. によれば、Riade の位置は未だ特定されていない。文献からはザクセン南東部の沼地（ドイツ語で Ried は「沼地」を意味し複数形は Riede）程度しか分らない。この戦いは「ウンストルート河畔の戦い Schlacht an der Unstrut」とされることも多い。

55) ハンガリー人の侵寇年・経路・到達点については49ページの「侵寇地図」参照のこと。

にも参列する。彼は王国最高位者が就任する四つの宮内職の一つ厩役 Marschall を拜命していた。アルヌルフは長女ユーディット Judith をオットー 1 世の弟ハインリヒ Heinrich に嫁がせる。この一連のアルヌルフ悪玉公の動きの背景には、アルヌルフが 923 年に息子エーバハルト Eberhard にバイエルンを相続させることをハインリヒ 1 世に承認させたのと引き換えに、アルヌルフが、ハインリヒ 1 世が後継王に指定した長男オットーの即位、を容認する、という取引があったようである。

ハインリヒ 1 世の死を知ると直ぐ、ハンガリー人が、バイエルン、フランケン、シュヴァーベンを通して、再びザクセン東方に姿を現す。東部フランケンから彼らはザクセンへの侵入を図ったが、状況を知ったオットー 1 世が既にその地域に兵を派遣していたので、彼らのザクセン侵寇は失敗に終る。

そんな中、毀誉褒貶相半ばする「悪玉」アルヌルフ公は 937 年 7 月 14 日に死去、アルヌルフ悪玉公の長男エーバハルトが跡目を相続する。彼はオットー 1 世と直ちに衝突する。その原因の最たるものは、エーバハルトがアルヌルフ悪玉公がバイエルンで享受した主体的自立性を更に拡大せんとしたことにあるらしい。オットー 1 世は武力を以てエーバハルトを攻め、938 年、彼を追放に追い込み、後任に、エーバハルトの叔父でアルヌルフ悪玉公の弟、ベルトルト Berthold を任命する。

ベルトルトは兄アルヌルフの存命中に既にカラントニア公になっていて、ヴィンチガウ Vintschgau やエンガディン Engadin の伯を兼ねていた。しかしベルトルトに委任されたバイエルンからはヴィンチガウとエンガディンが切り取られ、カラントニアもオットー 1 世の派遣する役人に支配される。この一連の事態は、バイエルンにとって大きな転換点をなす。つまり、その支配地は大きく削減され、バイエルンは最早その支配者を独自に決定できず、東フランク王国国王にその任命権を奪われ、更にバイエルンから司教任命権も剥奪されてしまったのである。

ベルトルトは国王オットー 1 世に忠誠を尽す。オットーも、ルーイトボルト家との密接な関係構築に努力、アルヌルフ悪玉公の三男アルヌルフ

Arnulf を宮廷伯に任命したりして、この三男を王権側に懐柔しようとする。が、ルーイトポルト家の矜持を満足させることはできなかった。

938年、ザクセンでオットー1世に対する叛乱が起こる。叛乱の原因は、王位継承から排除された王族の不満、諸侯権力を押さえつけようとするハインリヒ1世以来の政策に対する諸侯の憤懣などが挙げられよう。この叛乱の首謀者はオットー1世の異母兄タンクマル Thankmar とフランケン公エーバハルト Eberhard であった。一方、アルヌルフ悪玉公の長男エーバハルトはオットー1世の王位を承認しておらず、オットー1世はこれにも手を焼いていた。事態は予断を許さぬ状況。しかし、オットー1世にとって幸いなことに、この年の7月28日にはタンクマルが死に、フランケン公エーバハルトも王に赦しを乞うたので、叛乱は一件落着した。が、この間にハンガリー軍はザクセンを侵寇、更にティーリングゲンも劫掠した、とのことである。ザクセン東部を跳梁したハンガリー軍は住民の強烈な反攻に遭い、完全に殲滅されたらしい⁵⁶⁾。辛うじて帰り着いた者たちがこの事態をハンガリー人に伝えたため、ザクセンは、以後、ハンガリー人の襲撃から免れる。

同じ938年、今度は王弟ハインリヒ Heinrich が、ロートリングゲンのギーゼルベルト Giselbert と共に、オットー1世に対して謀反を起こす。その謀反にバイエルンの一部反ザクセン分子も呼応するものの、ベルトルト公はこれに加わらない。オットー1世はこの謀反をも奇跡的に収拾する。

ベルトルト公はハンガリー人に真正面から向き合う。彼は、ハンガリー人のバイエルンへの侵入を食い止めようとし、主としてオストマルクで彼らと戦う。943年8月12日、彼はトラウン Traun 河畔でハンガリー軍と遭遇する。ヴェルス Wels 近傍で、彼はバイエルンを強行突破しようとするハンガリー軍に打ち勝つ。これまでにない勝利、と称えられた戦勝である。

947年11月23日、ベルトルトが死ぬ。オットー1世の弟ハインリヒ(バイエルン公として：ハインリヒ1世)がその後任に任命される。その任命に

56) Lüttich S.95f.

際してはハインリヒの妻ユーディトがルーイトポルト家の出（ユーディトはアルヌルフ悪玉公の長女）であることが理由にされたのであろうが、ベルトルトの息子ハインリヒ Heinrich は、未成年だったため、無視されてしまう。バイエルンには世襲的公位継承権も否定される。ここに至ってバイエルンには反ザクセンの空気が、一層、張り詰めてくる。

オットー 1 世によって 938 年の謀反の罪を赦された新バイエルン公ハインリヒ 1 世は、内政上はルーイトポルト家との関係で困難さを抱えるが、外政に関しては国王オットー 1 世の強固な後ろ盾を得る。ハインリヒは、前任者ベルトルト同様、ハンガリー人攻撃を続け、その攻撃は激しさを増す。948 年、ハインリヒ 1 世はバイエルンでのハンガリー軍との戦いに勝利を収める。949 年、ハインリヒは勢いに乗ってハンガリー西部に攻め入る。レヴェ Lövö 近傍で戦うが、敵地での戦いにバイエルンは武運が無く、惨めな敗北に終る。

950 年秋、ハインリヒはこれに懲りず、再度敵地侵入を図る。タイス河にまで進軍して二つの戦いで勝利し、ハンガリー人同様、その地域を劫掠、上層の婦女子を捕虜にして無傷でバイエルンに引き返す。彼のこの戦勝はバイエルン人に歓呼の声を上げさせる。これに力を得たハインリヒ 1 世は、ハンガリー人に占拠されている領土を奪還した暁には、その領土を、兄オットー 1 世の王権強化のため、先ずは直接、自分の私領にしようとする。しかしこの意図はバイエルン人のバイエルン領への愛着心を刺激せずにはおかなかった。953 年、オットー 1 世に対して王息リッドルフ Liudorf とコンラート赤毛公 Konrad der Rote（オットー 1 世の長女 Liudgard の夫）の大叛乱が起こったとき、当然、バイエルン人は叛乱側に組みすることとなる。

それはさて置き、オットー 1 世は、950 年、バイエルン公ハインリヒ 1 世の協力を得てボヘミア国王ボレスラフを征服、ボヘミアをバイエルンに再び服属させ、更に彼は 951 年イタリアを攻略、952 年のアックスブルクの王国会議で、辺境領イストリア、アキレリア、ヴェローナ、トリエント Trient を含む旧ランゴバルド公領 langobardisches Herzogtum のバイエルンへの編

入を決定する。バイエルンは今や、北はフィヒテル山塊 Fichtelgebirge, 南はアドリア海 Adriatisches Meer, 東はウィーン山地 Wienerwald, 西はレヒ河 Lech にまで至る中世最大の領域を支配下に置く。こうして新たに加わった領土は、しかしながら、バイエルンが独立国として獲得したのではなく、東フランク王国と連合し東フランク王国国王の決定によってバイエルンに付加されたものであった。

953年, バイエルンをも巻き込んだ王息リッドルフの大叛乱が起こる。王息シュヴァーベン公リッドルフ, ロートリングンのコンラート赤毛公及びマインツ Mainz 大司教フリードリヒ Friedrich は, バイエルの諸侯と組んで, 国王に対して叛旗を翻す。オットー1世は先ずは王弟バイエルン公ハインリヒ1世に叛乱鎮圧への協力を求め, マインツにいるリッドルフを包囲するためバイエルン軍を派遣させる。バイエルン公ハインリヒはアルヌルフ悪玉公の三男で宮廷伯アルヌルフに留守を預ける。するとこのアルヌルフはリッドルフと手を組む。彼らの結託理由は, アルヌルフに言わせれば, バイエルン公ハインリヒこそが私をバイエルン公領から追い出したのだ, であり, 王息リッドルフに言わせれば, バイエルン公ハインリヒこそが私に父の恩顧を受けさせないようにした, つまり, バイエルン公ハインリヒにのみイタリア政策の論功行賞として領土を与える父オットー1世の遣り口が私には許せない, というものであった。リッドルフとアルヌルフにとっては王弟バイエルン公ハインリヒ1世こそが主敵だった。しかしこのアルヌルフの叛旗により, マインツ包囲のバイエルン軍は国王の戦列を離れる。バイエルン軍はリッドルフを先頭にバイエルンに戻る。内乱の場はライン河畔からバイエルンへ移る。バイエルンではルーイトポルト家の殆どすべての者たちがアルヌルフの叛乱に組みしており, 947年に死んだバイエルン公ベルトルトの妻ビーレトルド Biletrud すらも叛乱側につく。恐らく我が子ハインリヒ(後のハインリヒ3世バイエルン公)が王弟ハインリヒのために公位に就けなかったからであろう。バイエルン諸侯も殆どがルーイトポルト家に味方した。従ってバイエルンの人心はバイエルン公ハインリヒ1世から離れ, 軍も含め

て反オットー1世でまとまっていた。但し、バイエルン公ハインリヒ1世の妻ユーディト（アルヌルフ悪玉公の長女）だけは、ルーイトポルト家の中でただ一人、この叛乱に加わらなかった。

バイエルンがこうした状況にあった953-54年の冬、ハンガリー軍がアックスブルク近郊のシュヴァープミュンヒン Schwabmünchen に現れ掠奪行為を働く。内戦と外敵との戦いに疲れたバイエルン人は国王オットー1世に休戦協定締結を申し出て、休戦が成り立つ。その過程で双方が相手に対し、外敵を呼び寄せたのは誰だ、外敵と通じたのは誰だ、と非難の応酬をする。ハンガリー人が誰に依頼されてこの時点で現れたかは議論のあるところだが、リッドルフかコンラートかに依頼されて、というのが通説である⁵⁷⁾。このハンガリー人の出現は国王軍に有利に作用した。人心が、叛乱者側から離れ、オットー1世に傾いたからである。

このような事態の流れはバイエルン側から多数の脱落者を生んだ。残ったのはリッドルフとコンラート、ルーイトポルト家の者たちとなる。彼らはレーゲンスブルクに向かう。オットー1世の諸種の作戦も成果を挙げなかったため、オットーはレーゲンスブルクを包囲する。コンラートは6月に国王との間に和解を成立させる。籠城側は食糧が乏しくなる。そんな折、この叛乱に加わっていた宮廷伯アルヌルフが攻撃に出るが、ザクセン軍の反撃に遭い954年7月22日に戦死する。リッドルフは12月に父王オットーに降伏、その赦しを得る。しかし、バイエルンでは、その後も反抗が続き、オットーは955年再度レーゲンスブルクを包囲する。この一連の大叛乱は、955年5月1日のミュールドルフ Mühldorf 近郊の戦いで、オットー1世側の勝利を以って最終的に決着が付けられる。謀反人に対するハインリヒ1世の裁きは残酷だった。例えば、ザルツブルク大司教ヘーロルド Herold は目を潰され、アキレリア大司教エンギルフリード Engilfried は鞆丸を切り取られた、との

57) Büttner S.451f によれば、コンラート赤毛公は、ハンガリー軍の侵寇を知って、彼らをバイエルンから出国させロートリンゲンで跳梁させる努力をした。

こと⁵⁸⁾。ハンガリー人は、何の抵抗もしない他の地域に侵寇を重ねつつ、この情勢をじっと窺う。

10. レヒフェルトの戦い

ハンガリー軍の指導者ブルチュ⁵⁹⁾は、953-54年のオットー1世に対する大叛乱の様子から、オットーの権勢の低下を推測する。彼は、ドナウ地域にこれ以上東フランク王国の勢力を浸透させまい、この地におけるハンガリーの権益を断固擁護する、と決意し、軍をシュヴァーベン方面に向けてバイエルンに入る。今回の侵入は、従って単なる劫掠が目的ではなく、大きな政治的構想に基づくものであった。

955年6月末、ハンガリー軍がこれまでにない非常に大規模な編成でバイエルンを通過する。バイエルンは、オットー1世に対する王息リッドルフ及びロートリンゲンのコンラート赤毛公及びアルヌルフ悪玉公三男の宮廷伯アルヌルフの叛乱のため、荒れ果てている。ハンガリー軍はライン河に出てフランスに向かう予定だった⁶⁰⁾、或いは、彼らはオットー1世との戦いを目論んでいた⁶¹⁾、とされる。バイエルン公ハインリヒ1世は抵抗を即座に断念、オットー1世に急使を送る。「レヒフェルトの戦い Schlacht auf dem Lechfeld」(Lechfeld=レヒ河原)のプロローグである。

オットー1世は、この時、非常に困難な事態に直面していた。打ち続く国王への叛乱・謀反を利用して新たにスラヴ人がザクセンに侵入していた。将

58) Spitzlberger S.170 及び Hubensteiner S.76.

59) Büttner S.450fによれば、ブルチュは、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルの宮廷に長く滞在、ビザンツ帝国元老 Patrikios (vgl. LMa Bd.6) になり、洗礼も受けた。但し、このような経歴が彼の生来的な考え方・目標を捨てさせはしなかった。彼はビザンツ帝国から、洗練された手段を駆使して闊達に自己の構想を追求することを、学んだ。Büttnerの書に彼の滞在年は記載されていない。

60) Lüttich S.150.

61) Spitzlberger S.170.

にこのような事態であったが故に、ハンガリー軍は侵寇して来たのである。と言うのも、この直前までハンガリーの使節がオットー1世の宮廷に暫く滞在していた。その目的は不明とされるが⁶²⁾偵察行動であったことに間違いなからう。しかしオットー1世は、一瞬の迷いもなく、全軍を投入して侵入軍に対処する決断を下す。この戦いで自分が負ければ折角築いてきたヨーロッパにおける東フランク王国のヘゲモニーが長期に亘って失われる、と彼には分っていたからである。オットーは、内戦を平定したことであり全国から軍を結集できる、と判断したのであろう、彼は全国に非常召集令を発する。オットーは、しかし、国王軍の編成までに4週間はかかる、と踏み、ハンガリー軍のシュヴァーベン侵攻すら阻止し得なからう、と読む。従って、彼にできることと言えば、侵入者を更に西方に侵攻させないか、掠奪物と共に帰途に就く彼らを叩くことしかなかった。

オットー1世は、ザクセン東部を脅かすスラヴ人対策のため主力部隊をザクセンに残し、選りすぐりの近衛兵部隊と共にザクセンを発ち、南に向かう。この時点で既に1000名のボヘミア軍が合流したらしい。ハンガリー軍が更に侵攻を続けている、との連絡を受けた彼は、西に進路を取る。彼はウルム周辺で、フランケン、シュヴァーベン、ベーメン、そしてバイエルンから駆けつけた諸侯軍と合流する。ケルン大司教で王弟ブルン Brun の率いるロートリンゲン軍は、ハンガリー軍が決戦を避けて更に西に向かうことも考慮して、既にライン地域に張り付いている。オットー1世は初めて国内諸侯をまとめることに成功した。凶悪な外敵の侵入を前にして内戦のしこりは解けていた。バイエルン軍が、ハンガリー人との戦闘には長けている、との理由で、先陣を務める。8月初旬、ドナウ河とアルプス前縁地の間を恐ろしいまでに劫掠していたハンガリーの大軍がアックスブルク周辺に集結する。レヒ河左岸⁶³⁾に陣取った彼らは、8月8日、大軍を成して、先ずアックスブルクの町

62) Lüttich S.151.

63) 「レヒフェルトの戦い」の現場、及び両軍の本陣所在地が、レヒ河左岸か右岸か、は多くの論議がある。筆者は左岸説を採る。詳細は Lüttich S.154ff 参照。

を不意打ちする。これに失敗すると、彼らは町の包囲に移る。ブルチュ指揮下のハンガリー軍本隊は大規模攻撃を掛けてくるが、防壁で護られた町はそれを撃退する。彼らは通常、手間を省くため、防備を施した施設を回避する。しかし、今回の彼らの行動は完全に従来とは異なっていた。彼らは防壁の前にしがみ付き、翌朝になると、防壁を破断しようとする。いよいよ決戦か、と思われた。防御側は既に疲労困憊していた。しかし防壁内から外を見ると、ハンガリー兵士は、臆病風に吹かれてか、軍紀の乱れからか、鞭に叩かれながら前進しているのではないか。ハンガリー軍では鞭は日常的に使用され、進軍時にも退却時にも役立っていた。その時、突然ハンガリー軍の隊列が弛緩した。次ぎの瞬間、彼らは角笛を合図に後退し出した。防壁の中の人間には何が何だか分らなかったが、実は、953-54年のオットー1世への叛乱軍に加わっていたライゼンスブルク⁶⁴⁾のベルヒトルド Berchtold von Reisenburg (宮廷伯アルヌルフの子)が、ハンガリー軍に国王軍の接近を通報していたのだった。8月10日の朝、国王軍は、バイエルン3軍団を先頭に、フランケン軍団、精鋭揃いの国王軍団、シュヴァーベン軍団が続き、ボヘミアの輜重軍団がしんがりを務めた。この7軍団⁶⁵⁾は、敵の矢の集中攻撃を避けるため、樹木の生い茂る悪路を進む。突然、レヒ河から遠からぬ丘の上に、オットー1世軍を待ち受けていた敵の大軍が姿を現す。敵の一隊は直ちに迂回し、オットー1世率いる軍列のしんがりに食らいつく。もう少し経てばハンガリー軍本隊が本格的攻撃を仕掛けるは必定、と読んだオットー1世は、コンラート赤毛公率いる第4軍団を即座に一時後ろに回し、事態の收拾に当らせる。シュヴァーベン人から成る第6軍団、ボヘミア人から成る第7軍団は既に大混乱、戦況はオットー1世に不利だった。しかし第4軍団が瞬時に敵を追い払い、奪われた品物・捕虜になった味方の人員を奪い返し、戦局の逆転に成功する。第4軍団が元の位置に戻った時、前方にハンガリー軍本隊が現

64) ライゼンスブルクはウルム近辺にある城。Lüttich S.156 参照。

65) Schulze S.194 によれば、シュヴァーベン軍団を2軍団とし、合計8軍団、そしてオットー1世麾下の兵員を1万名及びそれと同程度の輜重兵としている。

れる。オットー1世自らが全軍の先頭に立ち——後にも先にも無いことだが——「聖槍⁶⁶⁾」を構え、敵と戦う。決着するまで戦いは長く続いた。しかし、きっちりと隊列を組んだオットー1世指揮下の騎兵にハンガリー軍は歯が立たず、国王軍の毅然たる戦い振りに怖れをなし、やがてハンガリー人は我先に防壁をかすめて逃亡し始める。当初、防壁の中の人々は、ハンガリー軍が大挙して押し寄せて来たので彼らが攻撃を開始した、と思う。だが、その後が続いて国王軍の軍列が現れ、前を行く敵兵を手当たり次第に打ちのめして行った。防壁の中の人々にもやっと事態が飲み込めた。戦場からオットー1世はバイエルンに飛脚を送る、敵の逃げ道を塞げ、と。国王軍側に勝利の女神が微笑む。

8月11日、東フランク王国軍は敵兵の一掃に努める。至る所で敵兵に襲いかかる。ハンガリー兵は我先に敗走する。国王の使者たちがこの事態を各所に通報する。森には農民が、イーザル河 Isar やイン河の渡しには周辺住民が立ち、憎い恐ろしい敗残兵を打ちのめし、絞め殺し、溺死させ、彼らが身に付けていた金目の物はすべて剥ぎ取る——。オットー1世の勝利はまたたく間に世に広まる。オットー自身が、この吉報をケルン大司教の実弟ブルンと実子リッドルフに伝える一方、各方面に急使を派遣した。

「レヒフェルトの戦い」での勝利は、単にハンガリー人に対する勝利という軍略的範疇を超えていた。この勝利により東フランク王国人がその帰属意識を強めたことは疑いの余地が無い。この戦勝は、従って、西方世界の歴史上、重要な転換点を成した、と言えよう。丁度、732年10月25日カーロリング家宮宰カール・マルテルがトゥールとポァチェ間の戦線でイスラム軍を

66) 926年ブルグンドのルードルフ2世はハインリヒ1世に臣従を誓う。その際ルードルフがハインリヒに渡した槍が Heilige Lanze で、以後、帝国権標 Reichs-insignien の一つとなる。キリスト処刑の際その脇腹に刺された槍、キリストが処刑された十字架の釘から作られた槍、聖人マウリティウスにまつわる槍、等と言われる伝説的聖遺物。この「聖槍」はイタリアの支配権・皇帝権を象徴する、とされる。

敗退させた快挙と同じように。

同時にこの戦勝が、東フランク王国の、或いはバイエルンの、東方植民第二波の開始を告げる合図にもなったことは、その後の歴史の示す通りである。

ハンガリー軍の指導者ブルチュ、レール Léi とシュル Sur は牢で一夜を過ごす。彼らはドナウ河を舟で下り逃亡せんとしたが捕らえられ、レーゲンスブルクのハインリヒ 1 世の元に突き出される。裁きは短時間で終る。ハインリヒが彼らに、キリスト教徒に対してどうしてあのように残酷な行為を働いたのか、と訊ねると「我々は至高の神から、汝らを苦しめるよう、使命を授かっているのだ。我々が汝らの迫害を止めれば、汝らが我々を殺す」⁶⁷⁾ と答える。そこでハインリヒが「自分の死を自分で好きなように選ぶがいい」と宣告すると、レールが「私の角笛を持って来て欲しい、吹いてみたいのだ、それから返事をしよう」と応ずる。角笛が彼に渡される。すると彼はハインリヒに近付き、角笛をいきなり振りかざし、ハインリヒの額に激しい一撃を加える。ハインリヒはとうとう倒れる⁶⁸⁾。レールは叫ぶ「汝が先に死ぬのだ。そしてあの世で私に仕えるのだ！」

三人の捕虜は直ちに絞首台に送られる。彼らは叫ぶ「我々を殺せばハンガリーでドイツ人捕虜が殺されるぞ！」この後、ドナウ盆地で 2 万人のドイツ人婦女子が打ち殺された、と言う——エピソードである。

ハンガリー人の侵寇は、以後、西方世界から絶えて無くなる。

彼らは、農民として、定着生活に入っていく。

おわりに

ルートヴィヒ 2 世ドイツ人王の治世を経て、アルヌルフ悪玉公の時代に、バイエルンはタンロ 3 世時代にも劣らぬ独自性を享受する。しかし、国王ハインリヒ 1 世の時代には完全に王権に服属、その自主独立性は殆ど完全に

67) 会話部分等は Spitzlberger S.173.

68) LMa Bd.4. Sp.2063 によれば、バイエルン公ハインリヒ 1 世はレーゲンスブルクで 955 年 11 月 1 日死去。

もぎ取られる。その鬱憤がオットー1世の治世で爆発する。そのため、ハンガリー人による劫掠・破壊に重なる形で、バイエルンは荒廃する、単に物理的荒廃だけでなく、心情も荒れ果てる。これはバイエルン地域にのみ現れたのではなく、当時の東フランク王国支配下の諸領国にも当てはまる現象であった。この人心の荒廃を見透かして、ハンガリー人がドナウ河とアルプス前縁地の間に、イナゴの如く、大群を成して現れる。この宿敵を前に、反目しあって来た東フランク王国諸侯は、オットー1世の召集令に応じ、小異を捨てて大同に就く。彼らは、全部族を挙げて、と思われるほどのハンガリー軍を徹底的に叩く。ハンガリー人は以後略奪行を行えなくなるほどに完全に殲滅される。これにより西方世界の安定的発展が、暫時、可能になる。

無文化状態のマジャール人の目には、僧院・教会に置かれた貴重な文化財は物質的財でしかなく、人間すらそうであった。多くの人々、多くの僧院・教会⁶⁹⁾がマジャール人の犠牲になる。マジャール人は、この時代に彼ら同様

69) バイエルン地域(辺境域を含む)においてその破壊がマジャール人によると推定される僧院等の名を挙げる。但し例えばパンノニアに関しては907年のハンガリー人による破壊で僧院・教会等が完全に姿を消してしまったという報告(Spitzlberger S.148)、またカラントニア東部も9世紀には存在していた教会や開拓村が10世紀初頭には跡形も無く消滅したとの報告(Handbuch der historischen Stätten. Österreich Bd.2. Hrsg. von Franz Huter. 1966. S.4)もあり、小規模な僧院或いは教会はその存在の名残りを地名或いは河川名にしか留めていない、ということもあるので(Spitzlberger S.154)、以下に挙げる地点は幸い記録に残っただけのこと、将に、氷山のほんの一角、でしかないことを特に強調しておきたい(記号について:*印はMagjarenによる破壊の推定が90%以上の確率で可能なケース,**印は60%以上,***印は30%以上のケースを示し,BurはBurgenlandを,MFrはMittelfrankenを,NBはNiederbayernを,NÖはNiederösterreichを,OBはOberbayernを,OÖはOberösterreichを,OpfはOberpfalzを,SlzはSalzburgを,SchwはSchwabenを,StmはSteiermarkを示す。出典は,Handbuch der historischen Stätten Deutschlands. Stuttgart. Kröner. Bd.7. Bayern. Hrsg. von Karl Bosl. 3., überarbeitete Aufl. 1981.及びHandbuch der historischen Stätten. Österreich Bd.1. Hrsg. von Karl Lechner. 1985.及びBd.2.及びHBG, Spitzlberger等)

ヨーロッパを跳梁したアラブ人・ノルマン人と異なって、独自の民族的宗教・文化を殆ど持たない。それが、却って、マジヤール人に掠奪行動を通じて西方世界からカトリックの教えを学び且つ観取し易くし、結果的に、民族全体の早期ローマ・カトリック化をもたらす。

約半世紀後、ハンガリー人はキリスト者の王を持つ。11世紀初頭のハンガリーの聖人王シュテファン1世の妃は、バイエルン公ハインリヒ1世の孫娘ギーゼラ Gisela⁷⁰⁾であり、19世紀末のハンガリー女王でオーストリア皇妃エリーザベト Elisabeth は、バイエルン王国国王ルートヴィヒ1世の姪である。ハンガリー人とバイエルン人、歴史の主要な転換点でその触れ合いを強く感じさせる存在、と言えようか。

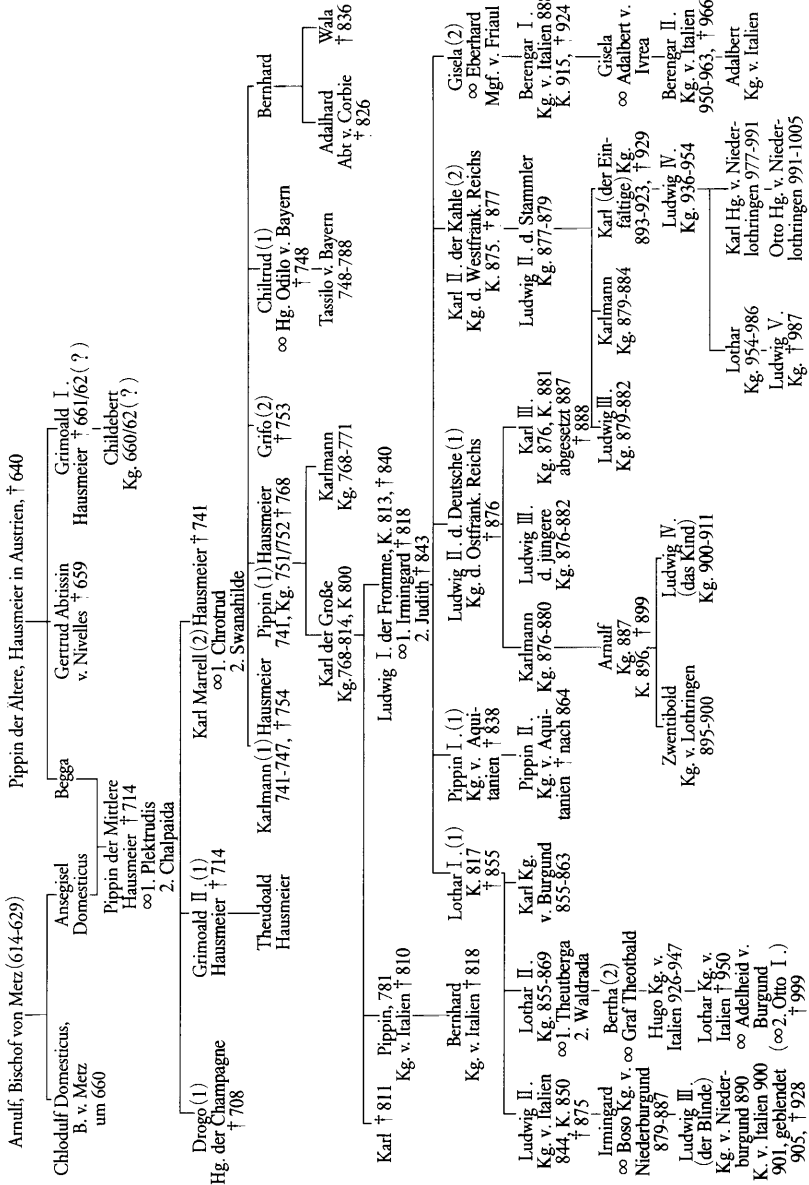
〈完〉

本論考はミュンヘン大学バイエルン史研究所所長 Prof. Dr. Walter Ziegler 氏のご好意と同研究所の便宜提供を受けて成立したものである。特記して謝意を表したい。

Abbach* (NB), Abstetten*** (NÖ), Altmünster** (OÖ), Altomünster*** (OB), Augsburg** (Schw), Benediktbeuern* (OB), Chammünster** (OPf), Chiemsee* (OB), Dießen a. Ammersee* (OB), Ebersberg* (OB), Enns** (OÖ), Fultenbach* (Schw), Füssen** (Schw), Gars* (OB), Göttweig* (NÖ), Grafrath* (OB), Hainburg* (NÖ), Haunsberg* (Slz), Hartberg* (Stm), Isen** (OB), Kipfenberg* (MFr), Kochel* (OB), Königshof** (Bur), Kremsmünster* (OÖ), Lechfeld* (Schw), Martinszell* (OB), Mautern*** (NÖ), Melk* (NÖ), Münchsmünster* (NB), Neuburg* (Schw: HBG Bd.1, S.219, Anm.180を参照), Niedertaich* (NB), Oberaltaich* (NB), Osterhofen* (NB), Passau*** (NB), Plattling* (NB), Polling* (OB), Rothalmünster* (NB), Salzburg* (Slz), Sandau a. Lech* (OB), St. Florianskirche* (OÖ), St. Pölten* (NÖ), St. Valentin*** (NÖ), Schliersee* (OB), Schrobenhausen** (OB), Tegernsee* (OB), Thierhaupten* (Schw), Tulln** (NÖ), Velden* (OB), Wasserburg a. Bodensee* (Schw), Weihestephan* (OB), Wels* (OÖ), Weltenburg* (NB), Wessobrunn* (OB), Winklarn* (NÖ), Wörth a.d. Donau* (OPf), Wörth i. Staffelsee* (OB).

70) 彼女の遺体はパッサウのニーデルンブルク Niedernburg 僧院に埋葬されている。

カーロリング家系図 註) 53, Gebhardt S.837.



バイエレンの統治者 HBG S.668.

アギロルフィング家 最後の二人の公

?-748 Odilo
748-788 Tassilo III.

カーロリング系 代官

788-799 Gerold I.
799-818 Audulf
?-861 Ernst I.
?-895 Engildeo II.

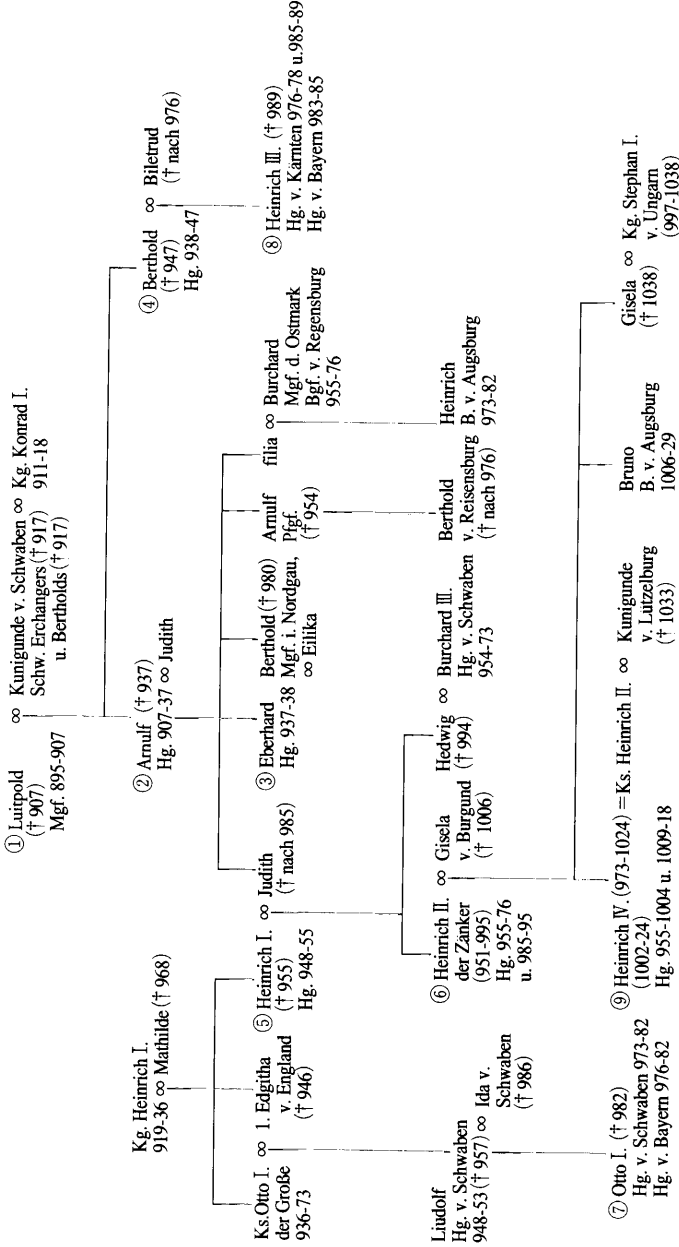
ルーイトポルト家 (次ページ参照)

歴代の公 (1070年迄)

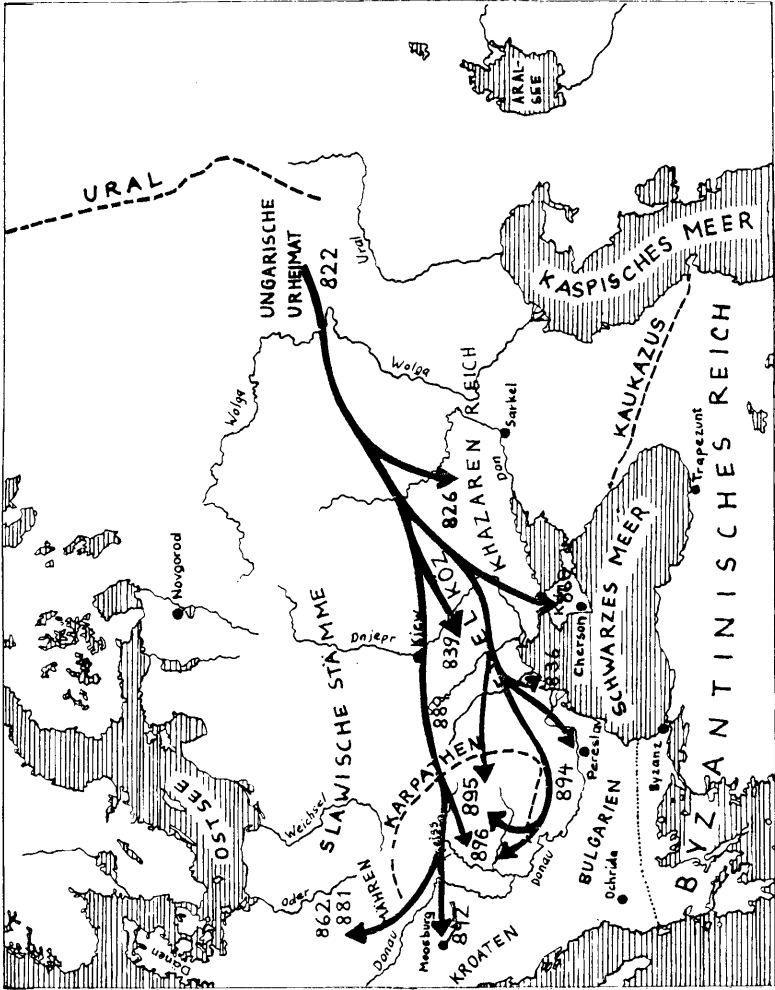
995-1004 Heinrich IV. (= Ks. Heinrich II. der Heilige)
1004-1009 Heinrich V. von Lützelburg
1009-1018 Heinrich IV.
1018-1026 Heinrich V. von Lützelburg
1026-1027 Konrad (= Kg. Konrad II.)
1027-1042 Heinrich VI. (= Ks. Heinrich III.)
1042-1047 Heinrich VII. von Lützelburg
1047-1049 Heinrich VI.
1049-1053 Konrad I. von Zütphen
1053-1054 Heinrich VIII. (= Ks. Heinrich IV.)
1054-1055 Konrad II.
1055-1061 Agnes, Gem. Ks. Heinrichs III.
1061-1070 Otto von Nordheim

B.=司教 Gf.=伯 Gem.=妻 Hg.=公 Kg.=王 Ks.=皇帝
Mgf.=辺境伯 nach=以後 Pfgf.=宮廷伯 Schw.=姉妹 T.=娘
∞=婚姻 †=没年

ルーイトポルト家 略譜 HBGS.669.



マジヤール人の移動経路と侵寇地図 (896年迄) Vajay, S. 151.



ハンガリー人の侵寇地図 (862—933年の間) Vajay, S. 177.
尚、本図中の Dalaminzier は本文中の Daleminzen に同じ。

